



アーティストブリッジ2019

ガザの画家3人の来日記録集



2019年2月10日(日) — 3月1日(金)

奇跡の来日が実現 ガザから3人の画家がやってきた

企画・主催 パレスチナのハート アートプロジェクト (PHAP)

<ガザとはどんなところか？>



From Wikimedia Commons, the free media repository

パレスチナ南西端、シナイ半島の北東に接し地中海沿いに長さ約45km、幅6～10kmに延びる細長い区域で、中心都市はガザ。

農耕に適した土地が少なく、またイスラエルは地場産業の発展を厳しく抑制してきたため、住民の多くはイスラエルへの日雇い労働と国連パレスチナ難民救済事業機関UNRWAの援助でかろうじて最低限の生活を維持してきた。このためイスラエルの占領支配に対する抵抗も強く、インティファダも1987年12月ガザにおける衝突が発端である。

1993年にイスラエルとPLO(パレスチナ解放機構)の間で結ばれた「オスロ合意」に基づいて、翌年ガザ地区は、ヨルダン川西岸地区と共に「パレスチナ自治区」になる。しかし現在ガザはイスラエルに軍事封鎖され、未だに平和は暗礁に乗り上げている。イスラエルは2008年、2009年、2012年、2014年とガザに大規模軍事侵攻を行い、大きな被害をもたらした。

ガザの出入口は、イスラエルに至る北のエレツとエジプトとの国境に位置する南のラファの2カ所のみ。さらに境界は高さ8mの壁に囲まれ、海上封鎖も行われている。出入国は完全にイスラエルのコントロール下にあり、パレスチナ人がガザを出入りする自由はない。まさに「屋根のない刑務所」であり、若者の失業率は60%に達している。

・面積 365km²(東京23区の約6割)

・人口 約200万(2019年推計)。

参考 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

アーティスト・ブリッジ 2019 記録集 目次

- | | |
|--|---|
| 01 謝辞 パレスチナのハート アートプロジェクト(PHAP)
代表 上條陽子 | 32 「パレスチナ週間 in さっぽろ ナクバの現場から」
松元保昭(パレスチナ連帯・札幌) |
| 02 メッセージ 駐日パレスチナ常駐総代表部
ワリード・シム代表 | 35 「戦場の〔お絵描き教室〕ー上條陽子のパレスチナ体験ー」
勅使河原純(美術評論家) |
| 03 アーティストブリッジ 出品者及びイベント一覧 | 38 「ガザという惑星」
志賀信夫(批評家) |
| 04 ソヘイル・セレイム 作品とメッセージ | 39 「開かれた社会へのメッセージー ガザ」
増田常德(画家) |
| 06 モハメド・アル・ハワジリ 作品とメッセージ | 40 「ガザの作家を送迎した記録」
イマイ恵子(PHAP会員／アーティストブリッジ2019実行委員) |
| 08 ライエッド・イサ 作品とメッセージ | 42 「ワンチームのオールジャパンが起こした奇跡 2019年2月」
長沢美抄子(BDS japan運営委員/西サハラ友の会運営委員) |
| 10 「パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展」
日本のアーティスト出品作品 | 47 「パレスチナ・ガザの画家達の来日に寄せて」
山脇富士子(PHAP会員)
寺尾ユリ子(PHAP会員) |
| 19 各地巡回展の様子 | 48 各地で開催されたトークの概要 |
| 22 「パレスチナ問題と「出会い」」
長沢栄治(東京大学名誉教授) | 50 日本滞在日程 2019年2月10日～3月1日 |
| 24 「パレスチナの子ども達から学ぶこと」
黒澤伸(金沢21世紀美術館副館長) | 52 パレスチナのハート アートプロジェクト(PHAP)の歩み |
| 26 「上條陽子の活動ーパレスチナ・ガザの画家たちの来日
によせてー」 宮田徹也(嵯峨美術大学客員教授) | 53 裏表紙裏 ご協力いただいた方々 |
| 28 「パレスチナによせて」
文川和(田川市美術館副館長) | |
| 29 「ガザのアーティスト 広瀬川美術館へ」
酒井重良(広瀬川美術館副館長) | |
| 30 ガザの画家たちの来日に寄せて・徐京植のメッセージ
「ガザを眼の前にしてアートは可能か」
徐京植(東京経済大学教授) | |

謝 辞

パレスチナのハート アートプロジェクト (PHAP) 代表 上條陽子

トランプ大統領はエルサレムを首都承認、パレスチナ自治区のヘブロン旧市街の世界文化遺産への登録に猛反発してユネスコ脱退宣言、またヘブロン入植許可などパレスチナへの圧力と弾圧は目に余るほどだ。黙ってじっとしてはいられなくなった。そこでパレスチナのハートアートプロジェクト (PHAP) は2018年1月ガザと日本の画家達との交流展を企画、日本にガザから3人の画家を招聘することを決定した。その準備のため<アーティスト・ブリッジ2019実行委員会>を立ち上げ、月一回の定例会を持った。作品の輸送や来日のためのビザ取得はとても難しく2%の可能性しかなく困難であるとも言われたが、あきらめるわけにはいかない、挑戦しなくてはと我々PHAP一同、ファイトが湧いてきたのだった。

2019年1月17日～1月22日の会期、会場は相模原市民ギャラリーと決定した。パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展 ―アーティスト・ブリッジ 2019―とし、支援する画家を募ったところ、賛同者も含めて約130人が参加してくれた。

2019年元旦1月1日、ガザから作品が絨毯として送られてきた。奇跡だ!!おめでとう!! 急きょ木枠を作り48点、作品 (キャンバス) を貼った。

ガザは物流も人も自由は無く常にイスラエルの攻撃にさらされ、「屋根のない刑務所」と言われている。展覧会の会期中、彼らの姿はなかった。しかし会場は日本とガザの作品が並べられ熱気に溢れた。初めて目にするガザに住む画家達の作品に多くの人が感動した。作品は生きる喜びが溢れ、暗く淋しい絵ではない根元的な土の中から湧いてくるような命の力強さを感じた。成功裏のうち展覧会は無事閉会した。

しかし我々はビザ取得をあきらめたわけではなかった。ギャラリーSHIMIZUの若いHIKARI (ひかり) 君の語学力とコンピューターと母親の清水みどりさんの実行力とすばやい行動力、2人の先進テクノロジーに助けられて、なんとビザがおりたのだった。

2月10日彼ら3人、ソヘイル・セレイム (45才)、モハメド・アル・ハワジリ (44才)、ライエッド・イサ (43才) は無事成田へ到着した。3月1日まで28日間の滞在許可が出た。私たちはあわただしく受け入れ準備をしなくてはならなかった。多くの協力のもと、ギャラリーSHIMIZU、広瀬川美術館 (群馬県)、桜台小学校 (相模原市南区)、東京大学東洋文化研究所、京都大学等で展示とトーク、映像が行われた。当然マスコミの取材があり、NHK、新聞、雑誌などに取り上げられ、どこの会場も大勢の来場者があった。作品とトークを通して、ガザの現状、状況を知る機会となった。多くの問題を提起し考えさせるよい時間となった。

最後にこの展覧会、招聘は多くの人々によって支えられたことをこの誌面で御礼申し上げます。殊更に、駐日パレスチナ常駐総代表部 代表ワリード・シラム氏、東京経済大学教授徐京植様、古居みずえ様、東京大学名誉教授長沢栄治様、長沢美抄子様、京都大学教授岡真理様、広瀬川美術館館長近藤浩通様、館長代理近藤節様、副館長酒井重良様、通訳を担当していただいた松尾晴紀様、森晋太郎様、山本薫様、渡辺真帆様、佐藤愛様、翻訳稲垣善子様。

巡回展が開催されました。広島せこへい美術館良永好子様、札幌市教育文化会館の展示松元保昭様、武蔵野美術大学水上泰財様、徳島県御所山現代アートスペース美馬宏衣様、桐生大学松村誠一様はじめ支援してくださった多くの皆様に御礼申し上げます。

パレスチナのハート アートプロジェクト (PHAP) とは?

2001年レバノンのパレスチナ難民キャンプでの絵画指導をきっかけに現代表上條陽子氏により立ち上げられました。主に現地パレスチナ難民キャンプでの絵画指導、日本国内での展覧会開催を行っています。(詳しくは、P52へ)

Draft of the Greeting for the Memorial Book of the Gaza Artists

駐日パレスチナ常駐総代表部 ワリード・シーム

In celebration of the publication of the memorial book for the Gaza Artist Bridge Exhibition, I extend my greetings.

Art is an international language. Art is a connection between people with different backgrounds, culture, and ways of thinking. On this occasion, these drawings are able to tell the Japanese people about the situation in Palestine.

Palestinian people are continuing to suffer from a severe situation, military occupation. The people in Gaza live in a “jail without a roof”; they live under an economic blockade without hardly enough resources and cannot leave Gaza without permission. Permission is only granted after a long period of time or in most cases, never. On this occasion as well, three artists had difficulty in simply visiting Japan. The people in The West Bank feel the occupation much more intimately; walls, settlers, soldiers, and racial discrimination is part of their daily life. However, art has not ceased to flourish.

Our first aim is for peace, and I believe the arts is part of the path towards coexistence.

Once again, I celebrate the publication of the memorial book and wish all those concerned peace and continued success.

「パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展」記録集のご出版をお祝い申し上げます。

芸術は世界の共通言語です。様々なバックグラウンドや文化、考え方を持つ人同士を繋ぐことができます。今回は絵画が日本とパレスチナを繋ぎ、日本の方々にパレスチナの現状を伝えることができました。

パレスチナは長年、軍事占領という厳しい状況に置かれています。経済封鎖を受けているガザ地区は「天井のない監獄」と言われており、人々は十分な物資もなく、許可がなければ国境の外に出ることもできません。今回3人のアーティストたちが来日さえもままならなかったように、出国許可を得るには長い時間がかかる、もしくは許可が出ないことがほとんどです。ヨルダン川西岸地区では占領はより身近なものでしょう。日々、分離壁や入植者、兵士と隣り合わせの生活で差別的待遇を受けています。しかし、このような状況の中でも芸術は生まれ続けているのです。

私たちは平和を望んでいます。そして、芸術は平和的な共存への道の一つであると信じています。

今一度記録集のご出版をお祝いするとともに関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。



アーティストブリッジ2019

パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展

2019年1月17日（木）－1月22日（火） 相模原市民ギャラリー

パレスチナはイスラエルの占領下70年になります。ガザは天井のない刑務所とか鳥籠の生活といわれています。水を初めガソリンや沢山の物品がガザに自由に入る事はありません。当然人々の出入りも厳しく制限されています。画家達は劣悪な環境の中で作品を制作し暮らしています。

今回、初めてガザから三人の画家（40代）を日本に迎える事となりました。思いかけず大勢の出品者、賛同者、協力者の方々の善意とご支援で実現することになり、感謝感激です。来日に合わせて、現状と状況の報告、未来への希望など、交流を通して語り合い、国際社会の中で私達が何ができるか共に考えて行きたいと思います。平和と安全を願っています。

代表 上條陽子



<出品作家>

ソヘイル・セレイム
モハメド・アル・ハワジリ
ライエッド・イサ

赤倉昭男	神山円	館野邦栄	松川暖子
飯野美穂	河口聖	田中茂	松村誠一
池田龍雄+	川崎文雄	田村晴海	ミト五十嵐
星埜恵子+α	功刀達朗	知多秀夫	三木祥子
石原智是	五島三子男	ツトム・ミズタ	水上泰財
伊藤洋子	小林はくどう	鶴見厚子	宮本和雄
稲垣三郎	小林まどか	手塚廣子	村秋木綿
イマイ恵子	小林典子	寺田和幸	村上修子
今井博子	小堀令子	寺尾ユリ子	村田訓吉
上野遼	小松原浩	中嶋しい	室町克代
上杉さなえ	小用キヨシ	仲田亜希	八島久恵
右近多恵子	含真治	中西晴世	山川栄子
内田信	近藤幸夫	中村春日	山下晃伸
ウチダヨシエ	齋藤智子	中村安子	山田裕子
宇津エミ	酒井重良	根木山和子	山本美智代
浦崎勲	佐藤俊男	白允生	山本裕子
王曉鳴	さとうのりこ	原田敬一	横山タケ子
大坪美穂	澤田サチ	広田啓子	吉川信雄
小倉進	澤田昌子	福井慶子	吉澤繁子
大北利根子	下地俊子	深作洋子	吉武研司
小原義也	須藤美保	彦坂尚嘉	吉永智恵子
岡田尚子	関月子	福岡美智子	渡辺幸子
小田光代	高井佐和子	藤谷美貴雄	渡邊佐和子
小野由紀子	高瀬和恵	八角洋子	渡辺敏子
甲斐めぐみ	高田芳樹	細谷玉江	山口通三
柏木喜久子	高原浩一	本多陽子	吉川信一
上條陽子	田島和子	又村統	吉國かづこ
加藤義勝	田所伸子	増田常徳	

イベントスケジュール

- 1月17日 オープニング
- 1月18日 映画「オマールの壁」上映+トーク
- 1月20日 講演 徐京植（東京経済大学教授）
- 1月21日 映画「ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち」
上映+トーク 監督 古居みづえ



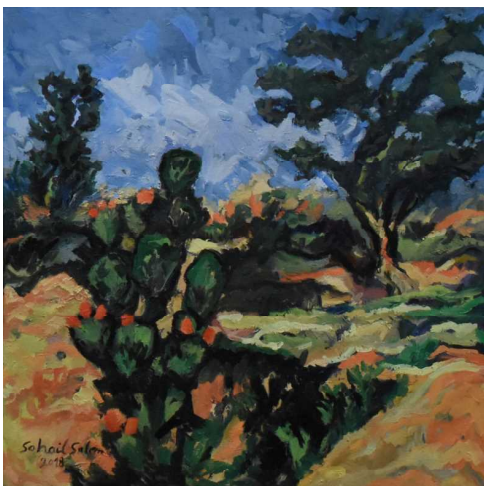
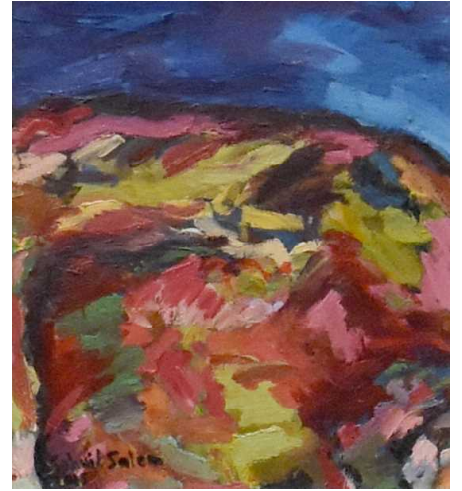
主催 パレスチナのハート アートプロジェクト
(PHAP) 代表 上條陽子
後援 相模原市
駐日パレスチナ常駐総代表部
JAALA美術家会議
アップリンク



Sohail Salem

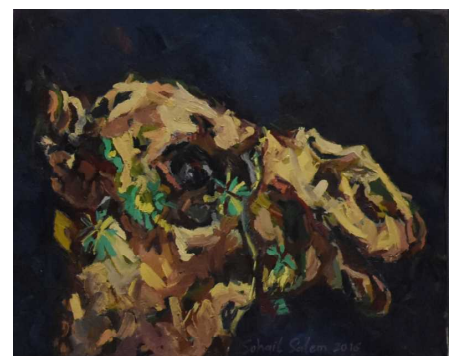
ソヘイル・セレイム

1974年、ガザで生まれる。アルアクサ
大学美術学士号取得。フランス他、国
外から招待出品。



＜メッセージ＞

1999年大学生だった時に「七人の天使」展覧会場でヨーコと出会った。以来20年間、関連が続いた。日本に来て感謝している。成田の入管でパスポートを見せたら珍しいので驚かれた。暮らしが変わって欲しい。現在グラフィックデザイナーとしての仕事をインターネットを通して行っている。作品は生きていること、つらいこと、楽観的なものをテーマに描いている。ディテールを消去、鋭い線、反発し合う色彩の三つの手法で、社会にメッセージを送っている。パレスチナは占領下、アラブ諸国との問題を抱えているが、民族の垣根を超えてアーティストとの交流が自由になって欲しい。



<メッセージ>

日本に来て非常にうれしい。パレスチナに関心を持ってくれてありがとう。43才人生の半ば、テーマの動物を不思議に見えるかもしれないが、ガザの現実の喜びと未来を描いている。
祖母が家畜の世話をして牛乳を売っていた。動物は友であり生活の支えで、ロバは荷物を運んでくれる。動物の骨から彫刻を作ったりして、新しいテクニックを使う機会にもなった。
ガザの暮らしは困難であるが、作品の中に希望を込めて描いている。
アーティストとして語り合いたい。
日本に来る夢が叶えてうれしい。ありがとう。

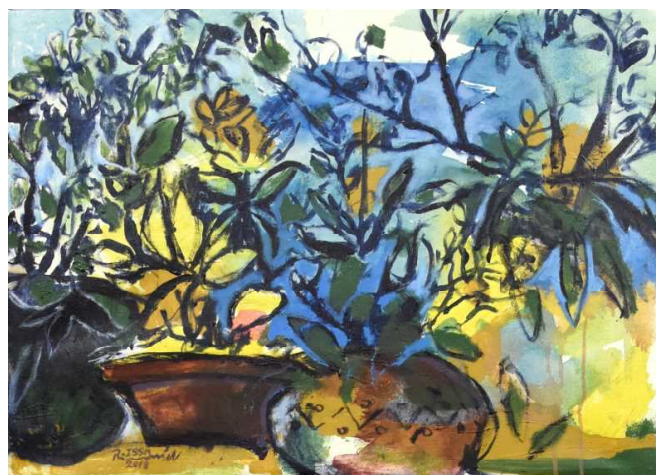




Raed Issa

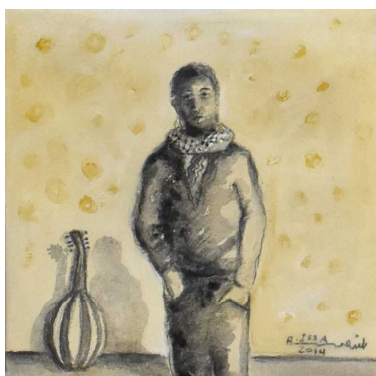
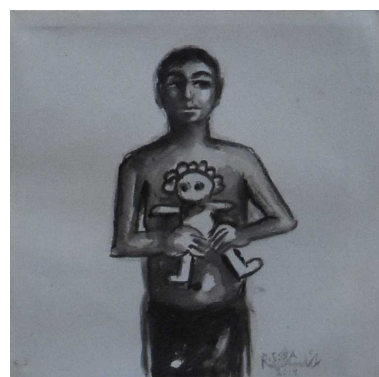
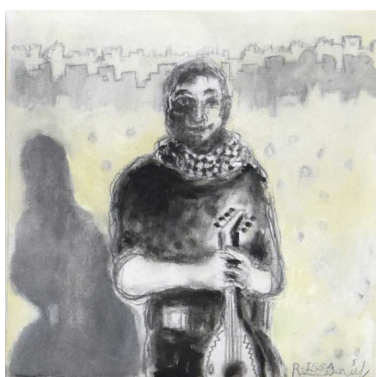
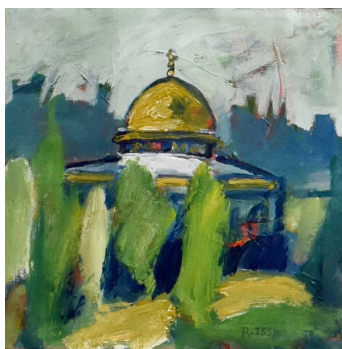
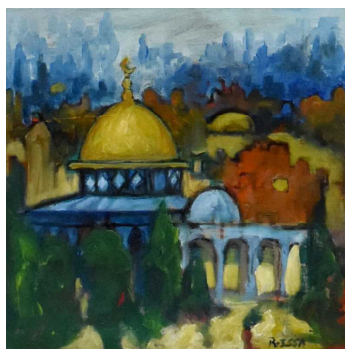
ライエッド・イサ

1975年、ガザの難民キャンプで生まれる。ガザの現代美術エルチカグループの創立者の一人。国外で活躍。イタリアローマの国際美術賞を受賞。



<メッセージ>

日本の皆様に感謝！！ 愛と平和のメッセージを送りたい。
ガザの状況はご存じの通りで困難を超えて作品を作っている。政治的なことを話さざるを得ないが、芸術家として来た。ビザを取得のため御尽力に感謝している。
人々の暮らし、花、身体、暗いもの、美しいものを描いている。子どもの頃から絵を描く事が好きだった。
ガザで日本のNGOの壁画を描くプロジェクトを通じてアートを学んだ。ヨルダンでシリア出身の先生のMarwanを通じて多くのアーティストと知り合ったことが2002年ヨーロッパへ行くことになった。
最近は画廊エルチカを拠点に活動している。



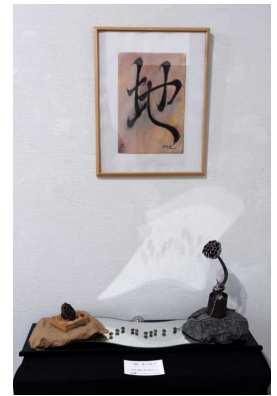
<日本のアーティスト>



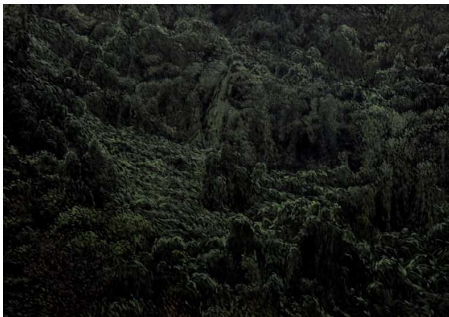
赤倉昭男



飯野美穂



池田龍雄＋
星埜恵子＋α



石原智是



伊藤洋子



稲垣三郎



イマイ恵子



今井博子



上野遼



上杉さなえ



右近多恵子



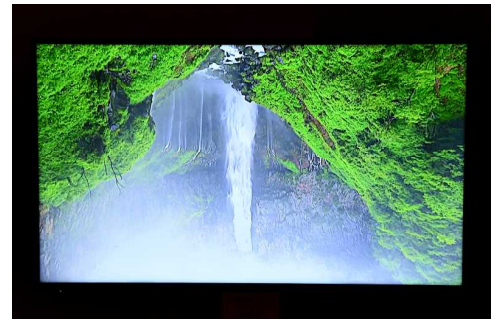
内田信



ウチダヨシエ



宇津エミ



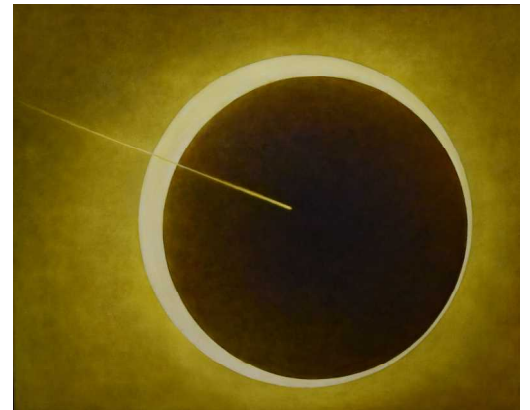
浦崎勲



王晓鸣



大坪美穂



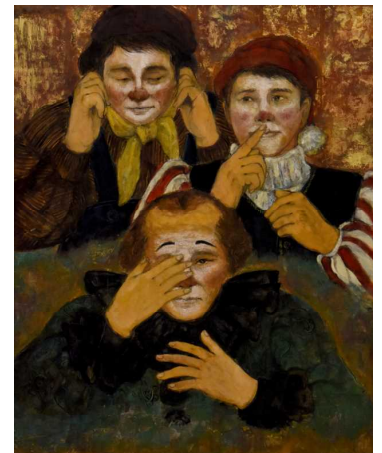
小倉進



大北利根子



小原義也



岡田尚子



小田光代



小野由紀子



甲斐めぐみ



柏木喜久子



上條陽子



加藤義勝



神山円



河口聖



川崎文雄



功刀達朗



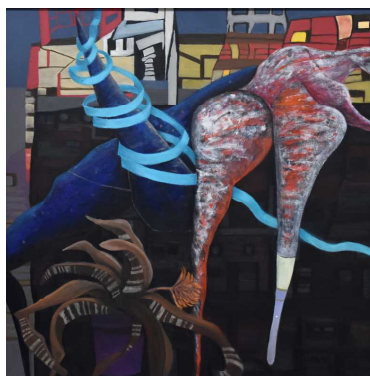
五島三子男



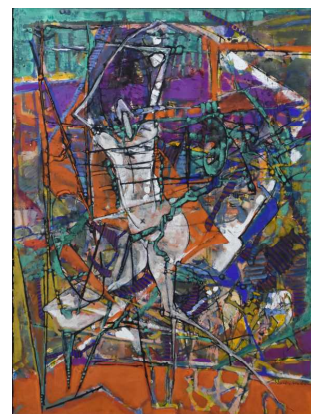
小林はくどう



小林まどか



小林典子



小堀令子



小松原浩



小用キヨシ



含真治



近藤幸夫



齋藤智子



酒井重良



佐藤俊男



さとうのりこ



澤田サチ



澤田昌子



下地俊子



須藤美保



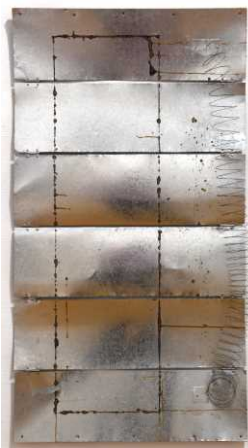
関月子



高井佐和子



高瀬和恵



高田芳樹



高原浩一



田島和子



田所伸子



館野邦栄



田中茂



田村晴海



知多秀夫



ツトム・ミズタ



鶴見厚子



手塚廣子



寺田和幸



寺尾ユリ子



中嶋しい



仲田亜希



中西晴世



中村春日



中村安子



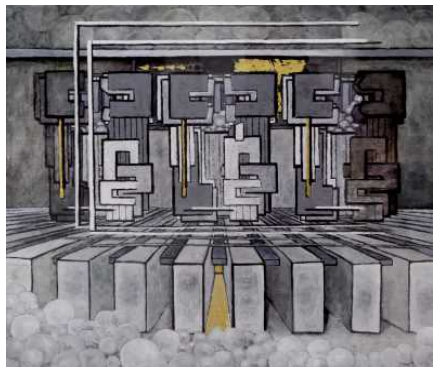
根木山和子



白允生



原田敬一



広田啓子



福井慶子



深作洋子



彦坂尚嘉



福岡美智子



藤谷美貴雄



八角洋子



細谷玉江



本多陽子



又村統



増田常德



松川暖子



松村誠一



ミト五十嵐



三木祥子



水上泰財



宮本和雄



村秋木綿



村上修子



村田訓吉



室町克代



八島久恵



山川栄子



山下晃伸



山田裕子



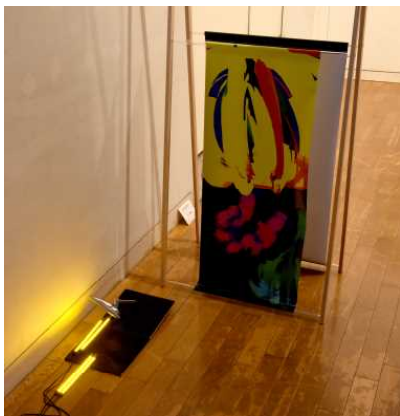
山本美智代



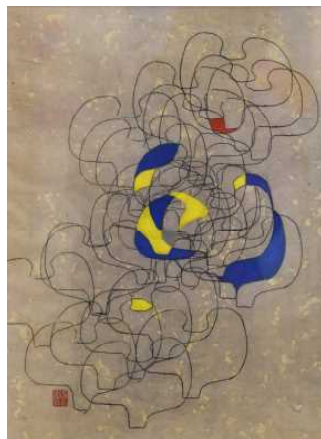
山本裕子



横山タケ子



吉川信雄



吉澤繁子



吉武研司



吉永智恵子



渡辺幸子



渡邊佐和子



渡辺敏子



山口通三



吉川信一



吉國かづこ

各地巡回展の紹介

皆様のご協力により日本全国で展覧会を開催いたしました。



相模原市民ギャラリー オープニング



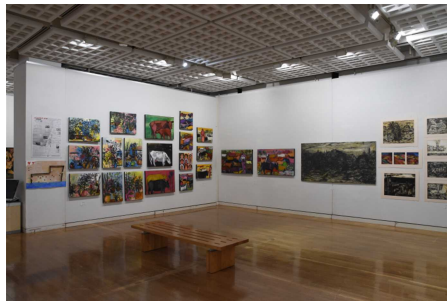
ギャラリーSHIMIZU



御所山王子現代アーツスペース



相模原市民ギャラリー パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展 2019年1月17日（木）－ 1月22日（火）



3人のガザの作家の作品50点と日本の作家110人の作品を展覧、残念ながら3人の来日は会期に間に合わなかったが、多くの来場者でにぎわった。会期中、徐京植教授の講演、古居みずえ監督の映画上映＋トークを開催した。



ギャラリーSHIMIZU（横浜市） ガザの画家による展覧会&アーティスト・トーク 2019年1月25日（金）－ 2月26日（火）

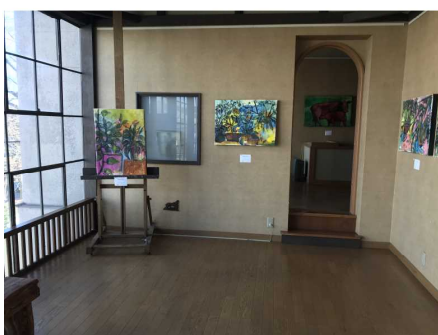


ギャラリーSHIMIZUは今回の企画の拠点となった。会期中、林文子横浜市長が来廊、またNHKの取材も入りTVで放映された。

トークは2月19日、23日と2回開催され、いずれも多くの人が詰めかけ、画廊に入りきれないほどであった。こんな満員になるのは開廊以来初めてのことで、画廊オーナーもアートの持つ力のすばらしさに感無量であった。



広瀬川美術館（前橋市） パレスチナ・ガザの画家三人展 2019年2月1日（金）－ 2月17日（日）



広瀬川河畔にたたずむ美術館です。建物は国登録有形文化財にもなっている。

トークは2月16日に開催され、また山本龍前橋市長の手配でまえばしCITYエフエムにも出演した。

**パレスチナ
子どもの作品展**
桜台小学校内 桜台美術館
2月5日(火)～2月25日(月)
一般公開日 2月17日(日) 10:00 - 16:00



主催：パレスチナ・ハート アートプロジェクト

相模原市立桜台小学校 桜台美術館（相模原市） パレスチナ・ガザの画家三人展&子どもの作品展 2019年2月5日（火）－ 2月25日（月）



ガザの作家3人とレバノンのパレスチナ難民キャンプの子どもたちの作品を展示。桜台小学校の先生方や父母のボランティアの皆さんとテーブルを囲んでのトークを行った。
相模経済新聞の取材を受けた。

東京大学東洋文化研究所1階玄関ホール パレスチナ・ガザの画家三人展 2019年2月21日（木）－ 3月7日（木）



東京大学の長沢栄治教授と長沢美抄子氏のご尽力により、展覧会とトーク（2/28）を開催した。
（※詳しくは、P42 長沢美抄子氏の寄稿文を）
展覧会のアンケートより一件紹介する。
「ガザの大変な生活の中、色鮮やかな絵画、穏やかな絵画、ユーモアのある絵画が生み出されていることに感銘を受けました。この表現がたくさんの方々に届き、人間が創造力を通じてつながることができる力が、ガザの人々にも力になり、事態を少しでも動かす方向に向かえたらと思いました」

京都大学吉田南キャンパス パレスチナ・ガザの画家三人展 2019年2月27日（水）



京都大学にて展覧会とトークを開催、渡辺真帆氏（日本国際ヴォランティアセンター）の講演「完全封鎖下のガザの現況」と岡真理教授の進行によるトークを行った。
そして滞在中唯一とも言える観光として京都を楽しんでもらう。

せこへい美術館（広島市） パレスチナ・ガザの画家たち作品展 2019年8月10日（土）－ 8月18日（日）



今回の展覧会場は旧日本銀行広島支店で、74年前の原爆投下にも耐えた強固な建物。フロア階にパレスチナの子どもの絵を、3Fにガザの3人の画家の作品を展示した。
爆心地からわずか380mにあったという会場ということもあり、原爆の重さをひしひしと感じた。



せこへい美術館
パレスチナ・ガザの画家たち作品展
2019年8月10日（土）－ 8月18日（日）

「せこへい」美術館は、世界の子どもの絵画を展示する美術館です。世界中の子どもたちが描いた絵画を、世界中の子どもたちに紹介し、世界の平和と文化の理解を促進することを目的としています。

パレスチナ・ガザの画家たち作品展
2019年8月10日（土）－ 8月18日（日）

パレスチナ・ガザの画家たち作品展は、パレスチナ・ガザの子どもたちが描いた絵画を展示する機会です。パレスチナ・ガザの子どもたちは、戦争や紛争の中で生活しています。彼らは、戦争や紛争の悲惨な現実を絵画に表現しています。彼らの絵画は、戦争や紛争の悲惨な現実を伝えるだけでなく、平和を望むメッセージも伝えています。

パレスチナ・ガザの画家たち作品展は、パレスチナ・ガザの子どもたちの作品を展示する機会です。彼らの作品は、戦争や紛争の悲惨な現実を伝えるだけでなく、平和を望むメッセージも伝えています。

パレスチナ週間 in さっぽろ ガザ絵画展-ナクバの現場から-

描くことは生きること、抵抗すること、心をつなぐこと

'19 9/3(火)~8(日)

札幌教育文化会館4階ギャラリー
 (札幌市中央区1条13丁目、011-271-5821)
10:00開場 19:00閉館
 (開場日と同日17:00開場)
入場料：無料

＜オープニング＞
 9月3日(火) 18:00~20:00
401研修室のギャラリー
 ガザ絵画展「パレスチナの子供たち」とし
 自国絵画展「抵抗」をテーマに、
オープニング・パーティー



「パレスチナ」は、アラビア語で「緑」ないし「緑の国」を意味する。パレスチナのキリスト教徒が提唱する解放の神学運動と抵抗を象徴する名称となった。今年1月、日本で「サビールの祈り・パレスチナ解放の神学」(教文館)が刊行された。著者は、パレスチナで自ら難民生活を経験したキリスト教徒、エルサレム中東聖公会の司教ナウム・アディーヴ神父。西側の地パレスチナに暮らす人々の顔顔と知り、思いがけに耳を聴く。市民のみなさんと共に考えたいと思う。

主催：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー

協賛：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー

後援：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー

連絡先：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー、札幌市教育文化会館4階ギャラリー

札幌市教育文化会館 4階ギャラリー(札幌市)

ガザ絵画展 -ナクバの現場から- 2019年9月3日(火)- 9月8日(日)

パレスチナ週間 in さっぽろ関連企画

サビール講演会
パレスチナ問題とキリスト教
 講師：岩城 聡さん (聖公会札幌「サビールの祈り」(教文館) 監修者)
 応答者：清水愛紗さん (聖公会札幌大学を教員、聖公会)

9/5(木) 18:30~21:00 開場 18:00
 聖公会札幌キリスト教会 (北大南門南側)
 (札幌市中央区南一条西五丁目、011-742-7330)
 入場料：(全席自由) 500円

「サビール」とは、アラビア語で「緑」ないし「緑の国」を意味する。パレスチナのキリスト教徒が提唱する解放の神学運動と抵抗を象徴する名称となった。今年1月、日本で「サビールの祈り・パレスチナ解放の神学」(教文館)が刊行された。著者は、パレスチナで自ら難民生活を経験したキリスト教徒、エルサレム中東聖公会の司教ナウム・アディーヴ神父。西側の地パレスチナに暮らす人々の顔顔と知り、思いがけに耳を聴く。市民のみなさんと共に考えたいと思う。

徐京植講演会
パレスチナから考える東アジア
 講演資料提供：NHK ころの時代(文芸部)
 人生〜「ガザに」を生きる」上原

9/6(金) 18:00~21:00 開場 17:30
 札幌市教育文化会館4階講堂
 (札幌市中央区南一条西五丁目、011-271-5821)
 入場料：(全席自由) 500円

日本は、政府が歴史と真実を隠蔽し、偽造し捏造する時代に突入している。まるで植民地政策の過激な加害者になったかのように、国益の名のもとに政府が率先して隣国を威嚇し、認めようとしている。さらには中東ホルムズ海峡にまで軍艦を派遣し、南シナ海・南中国海・インド・太平洋の軍事覇権を確立し、米・イスラエル世界覇権の一翼を担おうと画策している。いまを共に自国領土の防衛とパレスチナ人の解放を闘うのが、自らの思想を闘いできた在日朝鮮人が革命の力で正義を唱え、日本と東アジアの未来を託する。(徐京植さんは、作家・東京経済大学教授)

主催：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂

協賛：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂

後援：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂

連絡先：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂

自国を愛護されたパレスチナの70年

ガザの画家たち展

2019・9.16(月)~10.4(金) AM11:00~PM6:00

会場：札幌市教育文化会館4階講堂

「パレスチナとアートを考える」(札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂)

連絡先：札幌市教育文化会館、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂、札幌市教育文化会館4階講堂

武蔵野美術大学・FALギャラリー(小平市)

ガザの画家たち展

2019年9月16日(月) - 10月4日(金)

展覧会の初日(9/16)に徐京植教授・増田常德氏・上條陽子による講演と鼎談が開催され、美大生や多数の人が参加し、質疑応答も活発であった。

「芸術は現在のパレスチナ問題に、少しでも寄与しているのか？」を考える機会となれたかもしれない。



AWA現代アート展2019

お山の芸術祭

2019年11月2日(土)~11月16日(土)

御所山王子現代アートスペース

会場：御所山王子現代アートスペース

連絡先：御所山王子現代アートスペース

御所山王子現代アートスペース(阿波市)

パレスチナ・ガザの画家三人展

2019年11月2日(土) - 11月16日(土)

徳島県阿波市にある展覧会場は、古い伽藍の様な建物で、畳の部屋に竹の棧を組み立てて作品を飾った。11/4に上條陽子が講演を行った。



◎記念講演会「パレスチナとアートを考える」

講師：上條 陽子
 パレスチナのハートプロジェクト主宰
酒井 重良
 作家、版画家、広瀬川美術館館長

2019年1月1日、パレスチナ・ガザの三人の画家(ツハ・ハズリ、イサ)の作品、約10点が日本に初めて展示されました。そして三人の画家が来日し、2月10日から3月1日まで展示しました。展示が終了した。展示が終了した。展示が終了した。

2/15(土)13:30 - 11号館2F大講堂(13:00開場)

パレスチナ在住作家の作品

Fashion Show - The last
 2/18(日)13:30 - 11号館2F大講堂

高校生のための進学説明会&見学ツアー
 2/15(土)、16(日) 受付時間 10:30~11:00

桐生大学(桐生市)

パレスチナ・ガザの画家三人展&子どもの作品展

2020年2月14日(金) - 2月16日(日)

桐生大学の短期大学部／アート・デザイン科の卒業制作展と合わせて、ガザの画家の作品とパレスチナの子どもの作品を展示した。

2/15に酒井重良氏と上條陽子が講演会を行った。

学生たちより：「はじめてパレスチナやガザのことを知った。子ども達が絵を描くのがぜいたくなことだと今まで考えたこともなかった。」



パレスチナ問題と「出会い」

長沢栄治（東京大学名誉教授）

パレスチナ・ガザ画家三人展（アーティスト・ブリッジ 2019）が、2019 年 2 月 21 日（木）から 3 月 7 日（木）までの一週間、東京大学東洋文化研究所の 1 階玄関ホールで開かれた。開催期間中の 2 月 28 日（木）には、徐京植先生を迎えて 3 人の画家たちとの「ギャラリー・トーク」も開かれ、多くの参加者により熱心な議論がなされた。この場を借りて、今回の企画をボランティアの形で手伝ってくださった方々に感謝したい。

パレスチナ問題に関しては、これまで研究所の会議室や他学部の教室を会場に開催される数々の研究会やシンポジウム、映画上映会などのお世話をしてきた。そして今回は、同年の 3 月の末に定年退職を控えていたため、最後の企画となった。思い返すと、私自身のパレスチナ問題との出会いは、中東研究を始めた 1976 年、43 年前になる。大学を卒業し、アジア経済研究所に就職し、アラビア語の語学研修を受けた。贅沢なことに奴田原睦明先生（東京外国語大学）による個人レッスンであった。その頃、先生に同伴して、PLO 東京駐在事務所を訪れ、同事務所の代表であった故ファトヒー・アブドルハミードさん（略称の「ハミードさん」の名前で日本人には親しく呼ばれた）から、難民として育ったライフヒストリーを聞く機会を得たのが最初であった。もちろん、アラビア語は習いたてであったから、ハミードさんの話の内容はほとんど分からず、毎日が睡魔との戦いであった。アラブのお菓子を食べたのも、そのときが初めてであったような気がする。

それから後、パレスチナ問題は今日にいたるまで激しく目まぐるしい展開を示した。明るい光が射したかに見えた時期もあった。しかし、その希望は幻影に終わり、全体として見るならパレスチナ人の人たちの苦難がますます強まっていった年月であった。その間、日本においてこの問題に関わる人たちの顔ぶれも変わった。問題との関わりを継続した人の多くは、問題を研究対象とする研究者やジャーナリスト、あるいは難民となった人たちを支援する NGO などの関係者であった。しかし、そうした「職業的な」関わりは持たなくとも、長い期間、関心を持ち続けている人たちがいることに、その姿勢にこころから敬意を表したいと思う。なぜなら、それは現代の日本ではなかなか難しいことだからである。

以前に別のエッセイでも引用したことがあるが、「空爆の次は花見のニュースかな」（朝日俳壇「朝日新聞」2017 年 5 月 7 日：杉江美枝さん作）という句は、日本人の世界の見方を的確に表した秀作である。中東で起きる悲劇を自分とは関係ない他人ごととしてすぐに忘れてしまう。パレスチナ・ガザ三人展が日本で企画されたのは、前年にガザ地区で「帰還のための大行進」デモが始まってから一年近く過ぎた時期であった。1948 年のナクバ（パレスチナ人が追放され、難民となった大災厄）から 60 年目の 2018 年、3 月 30 日（土地の日）に始まったこの運動は、現在も続いている。毎週、金曜日に行なわれるデモは、NGO「パレスチナ人権センターPCHR」によれば、2019 年 10 月 11 日で 78 回目を数え、これまで 214 人（うち子ども 46 人）がイスラエル兵による銃撃により殺害されたという。この人々の命を懸けた運動は、当初、メディアでも注目されて報道されていたが、これまでの例と同じく、しばらくするとテレビの画面の裏側の闇に消えていった。

もちろん国内にも、世界にも私たちが関心を持ち、時には行動に移さなければならない問題は、数えきれないくらい多い。しかし、「支援疲れ」という言葉があるように、普通の人が様々な日々の問題を抱えながら、問題への関心と行動を継続することは難しい。しかし、それでも続けることができる、関心や行動

の継続を支えるものがあるとしたら、それは何であろうか。

その点で今回、ガザから来た3名の画家との出会いで学ぶものがあつた。2008年暮れから09年1月にかけてのイスラエルによる激しいガザ攻撃により、多くの人命が失われた。画家たちの家も作品も爆撃で破壊された。しかし、破壊の後、彼らは「エルティカ」という芸術家の集団を立ち上げた。ELTIQAGroup for Contemporary Artists（ウェブサイト：<http://eltiqa.com/>）である。エルティカ（アラビア語の正確な発音では「イルティカーウ」）とは「出会い」を意味する。若手の芸術家が集う機会を与え、また女性の画家たちに安心して活動できるアトリエのスペースを提供する現代芸術家の運動である。

問題への関心と行動を支えるものは、人と人との「出会い」ではないか。エルティカという名前を聞いてそのことに気がついた。一回しか会ったことがない人でも、その顔、その言葉が一生残り、こころの支えとなることがある。直接の出会いもあれば、本や新聞報道、テレビのインタビューの中で出会う人たちの言葉も出会いの重要な機会となることがある。私にとっては、良質のパレスチナ知識人であったハミードさんに始まり、その後に出会った人たちとの忘れられない思い出がある。今回の3人の画家たちとの出会いもそれに加わることになるだろう。アラビア語の別れの言葉には、イラー・リカーウという言葉がある。中国語の「再見（ツァイ・チェン）」と同じように、「またの出会いまで」という意味である。人と人との出会いの積み重ねこそが、世界にはびこる不正を正す力となるのだということを信じたい。



長沢栄治教授



2月15日朝日新聞取材後、長沢美抄子氏と

パレスチナの子ども達から学ぶこと

黒澤 伸（金沢 21 世紀美術館副館長）

「パレスチナのハートアートプロジェクト」の一環として、レバノンの難民キャンプに暮らす子ども達の作品展を金沢で開催したのは2016年夏のことだった。いわゆる児童画展ではあるが、並んだ作品についての特徴を指摘するならば～普段生活している自然環境の持つ色彩感覚を反映してか～ まずは色彩のビッド（鮮烈）さであろうか。さらに観てゆくと、どの作品も児童画らしく屈託のないという以上に、不思議なほど迷いのない筆致で線や形が丹念に選ばれ、むしろ自信に満ちた堂々とした描画であることに気付く。そしてどれもがライブ感に溢れ、かつ個性的なのだ。それもまた不思議なことで、面白いのは例えば同じ花瓶を描きながら（文様からは同じ花瓶であることは想像できるのだが）その文様やら背景を含めてそれぞれが異なる場面を描いている（＝見ている）かのように、目の前のモチーフに対する解釈が個性的で楽しい。なぜそうなるのだろうか？ ここに、彼らがそれぞれ真剣に絵を描くことの面白さを探求している姿が浮かぶ。しかも喜びに溢れて…。

確かに、クレヨンをこすればそこには直ちに線が、絵の具を塗ればみるみるうちに鮮やかな色が出現する。魔法のように。手を動かせば、見ているものや知っていること感じる気持ちが目の前に現れる。絵の具やクレヨンで「自由に」何でもできる…児童画とはそもそもそういうものかもしれない。

だが彼らの置かれた特異な環境やその背景を知ると、子どもたちの描く絵は別な意味や様相を帯びて立ち現れてくる。絵を描くという行為が、人の尊厳を守るための小さな、無意識の闘いの場でもある、と気づかされる。

「絵を描いたことがない子がいるのよ」…これがきっかけで展覧会の開催を決めるのだが、パレスチナのハート アートプロジェクトの代表である上條陽子氏から初めてこの言葉を聞いたとき、しばしの間、その意味が判らずにいた。皆さんには想像がつくだろうか？ 普段、難民キャンプでは絵の具やクレヨンが手に入らない、ということはわかる。しかし絵を描いたことがない！とは？ 自分が自分であるための、人が人になるための何か大切なことが欠落してはいないか、いったい何が奪われているのか。展覧会の告知印刷物を作る際、プロジェクトのメンバーは展覧会のタイトルに“それでもがんばる”という言葉を入れたがっていたのだが、若干唐突で、ありがちなフレーズでもあることからタイトルには入れなかった。ただ状況を理解すればするほど、そして作品に触れるにつけ、この言葉には確かに安易に使えないだけの圧倒的な意味と重さがあることがわかる。

描く…これは、外の世界と向き合い、そのやりとりの中で自分自身に起こる反応を紙の上に新たに創り出してゆく自己確認の行為だ。そのライブな時間にこれほど真剣に向き合う子ども達を想う時、絵を描く

ことが彼らにはその瞬間の自分の存在の証であり、生きることそのものなのだと理解できる。屈託のない
明るいビビッドな色彩の中に、圧倒的な理不尽や煩悶の中でも人間が取り得る態度、生き方、生き様、そ
して自由の本質を見る思いがする。なんという子ども達の強靱さか。

ぎりぎりの環境にしながら、彼らの絵は命の証を私たちに伝え、楽しませ、励まし、力を与えてくれる。
来場者にもこうしたことが伝わるようで、中には自分には何ができるのか、と深く悩まれてしまう人もい
た。もちろん、直ちにレバノンへ絵の具を届けることが誰にでもできるわけではない。それでも彼らの存
在を知ること、私達自身は変わることができる。彼らが伝えてくれているのは、私達の「尊厳」でもあ
るからだ。



子どもたちに絵画指導する上條陽子氏
2005年8月ブルジバラジネ難民キャンプ
(レバノン・ベイルート)



レバノンのパレスチナ難民キャンプ
の子どもの作品展 2016年夏開催
金沢湯涌創作の森ギャラリー
(上:チラシ 下:展覧会の様子)



1. パレスチナ・ガザのアーティストを招く

上條陽子の想いが実り、奇跡的にガザのアーティスト達が来日を果たした。私はその様子を身近で見ていたので、「週刊新聞新かながわ」に二度に亘って記事を書いた。

「パレスチナ・ガザのアーティストを招く_上」（第 2491 号、2019 年 4 月 7 日）では相模原市民ギャラリー、横浜・ギャラリーSHIMIZU、前橋・廣瀬川美術館での展覧会の様子を報告し、作品評を添えた。引用する。「ハワジリの動物達は太古の壁画のように生き生きしています。セレイムの植物とも動物とも見える作品から生命の尊さの叫びが聞こえます。イサの日常的な植物は人間が絶滅した後の未来の原始林を彷彿させるというように、三人の作品はいずれも優れているのです」。その上で「最も大切なことは、不可能と思われても実際に行動することではないか」とし、上條の生き方そのものがアートであると指摘した。

「同_下」（第 2492 号、4 月 14 日）では、三人が来日を果たし、急遽実現した二度目のギャラリーSHIMIZUでの展覧会と三人のトークの、特にそれぞれの作品解説を報告した。「イサさんは『花の作品は日本で発表する為に描きました。戦争だけではない、ガザの日常を伝えたかったのです。現実を直接描くのではなく、アーティストックに作品を創造しています』。／ハワジリさんは『私はジャーナリズムではなくアーティストとして、喜び溢れる色彩で、大切に育てた祖母から譲り受けた家畜である動物を描きました。祖母が家畜の乳を売って生計を立てたように、私も絵を売って自活しています』。／セレイムさんは『現実を描くだけでは足りません。細部に気を遣っています。線は鋭く、色は反撥しては調和するように。抵抗運動だけではなく、私個人と外の個人が繋がることを心掛けています。私は平和をもたらしたいのです』」。ここで重要なのは、ガザのアーティスト達は現代美術の発想と手法を身に付けていて、更に自らと自らの作品を成長させようと努力しているところにある。

私は以下のように、三者によるガザの動向を加え報告を終わらせた。「日本の鎖国、韓国の軍事時代、中国のWe bの制限など、様々に虐げられても人々は生き続けています。虐待の最新の方法、つまり真綿で首を絞められ、死に至らないのがガザの特徴でしょう。山手線に囲まれる程の土地には市場もあり、生活用品も売られています。『ゲート』を通らなければ水すらも入ってこないし、自分たちも外に出ることができません。イスラムの思想も地域によって異なり、一枚板ではない。宗教とは愛であるべきだと三者は考えています」。ガザが占領地区ではなく、「監視されている恐ろしさ」を多くの人に知って欲しい。

2. 上條陽子の活動

上條はガザのアーティストを招くことに尽力したが、上條の本業は勿論、アーティストである。作品を制作し、発表する。自己だけではなく仲間と展覧会を組織し、世に問いかける。私がこの原稿を書く段階で立ち会った、今年の上條の展覧会は「紙と知 上條陽子×崔弼圭展」（fei art museum | 6 月 25 日（火）-7 月 5 日（金））と、「第 28 回相模原芸術家協会展」（相模原市民ギャラリー | 9 月 6 日（金）-17 日（火））であった。

順番が逆になるが、「第 28 回相模原芸術家協会展」から論じると、この展覧会は正に相模原在住のアーティストが中心になっているという「だけ」の展覧会で、抽象、具象、フリーランス、団体展というあらゆる分野の作品が集っている。上條の前にあっては、派閥など存在しない。美術であること「だけ」が条

件なのだ。これはできそうでなかなかできないことである。9月7日（土）オープニングレセプションの際には、大野一雄と及川廣信に師事した相良ゆみが舞い、花を添えた。及川が二日前に94年の歳月を経て地上から消滅したので、相良にとって正に追悼の舞であったがそこに悲しみはなく、生きる喜びという試練を私は感じたのであった。

「紙と知」では、6月30日（土）にトークがあり、私が司会を務めた。上條と崔の二人展は始めてだが、二人は何十年も前からの旧知であり、話しに花が咲き、とても有意義なイベントであった。この頃、再び日本と韓国の貿易摩擦は最悪となったので、私は二人に本音を尋ねたところ、二人とも「アートの世界では関係ない。むしろ、アートの世界から繋がっていくべきであろう」という内容を話した。

上條の知り合いは国内の様々なアーティストだけではなく、ガザ、韓国などの世界に散らばっている。そうかといって大物ばかりの繋がりを保持するのではなく、私は銀座を含む都内で画廊を周っていると、上條と出くわすことが多々ある。上條は、いま、ここに生きるアーティストと作品と共にある。上條はこれからも活動を繰り返し続けていくのであろう。私はその応援を続けたい。



fei art museum 「紙と知-上條陽子×崔弼圭展」 上條展示風景 撮影：宮田徹也



パレスチナによせて

文川和（田川市美術館副館長）

豊かであり強烈な色彩と大胆な構図。
観客を圧倒してしまうメッセージ。
何処から生まれてくるのか・・・

2017年6月から九州の果て、かつては炭鉱の町であった福岡県の田川市美術館で「上條陽子とパレスチナの子どもたち」展を開催した。上條陽子氏の活動は割愛させていただくが彼女の熱意が迸る展覧会となった。パレスチナの子どもたちの絵も、来日した三人の作家たちの絵も同じ匂いがするのは同じ民族だからだろうか。

同じ環境の下で生きていれば、同じ様な匂いを発する絵を描くのだろうか。

囲まれた塀の中に生きていると言えば、米軍基地にかこまれた沖縄を連想する。沖縄も囲まれた塀の中に米軍基地があるのではなく、米軍基地にかこまれた社会に沖縄の人々が住んでいると言っても過言ではない。

囲まれていると言えば筑豊田川も然り。陸の孤島と呼ばれていたのも遠い昔の事ではない。此の田川の地もパレスチナや沖縄に相通ずるものがある。この地では過去のことかも知れないが抗い続けた歴史だ。唯、違うのはパレスチナも沖縄も鮮やかな色彩と自由に渴望している事。

2020年秋には田川市美術館にて『パレスチナのガザの画家たち展』が催される。何処がどの様に違うのか地域の人たちと考えてみたい。

「上條陽子とパレスチナの子どもたち」展（2017年開催） チラシ



ガザのアーティスト 広瀬川美術館へ

酒井重良（広瀬川美術館副館長）

前橋・広瀬川美術館では、パレスチナのハート・アートプロジェクトの一環として「パレスチナ・ガザの画家三人展」を開催いたしました。広瀬川美術館は、二紀会の同人・近藤嘉男の住居兼アトリエだったところで、萩原朔太郎の詩で有名な広瀬川の河畔に建てられています。アトリエの鉄枠の広い窓が特徴的な建物です。三人の画家達の絵は、それらの空間の中で、益々個性的な力を発揮しているように感じられました。美術館を訪れた人々は、その自由闊達なストロークと晴れやかな色彩に感銘を受けた様子で、皆熱心に見入っていました。

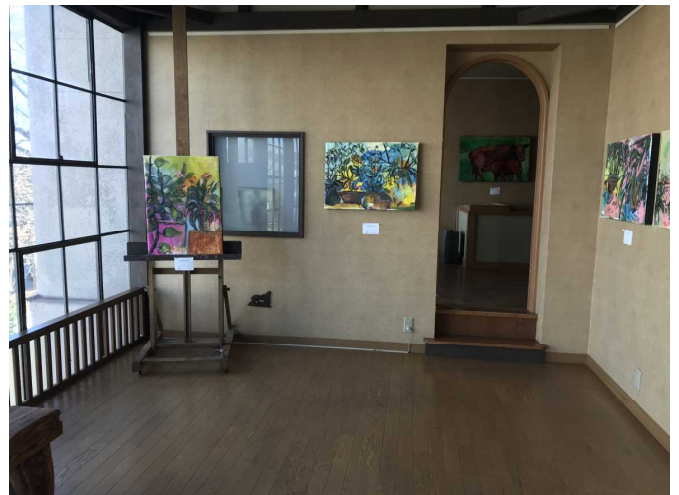
展覧会の会期は、当初 2019 年 2 月 1 日（金）から 10 日（日）まででしたが、翌週 17 日（日）まで延長しました。それは、困難視されていた画家達の来日が可能になったからです。上條陽子代表はじめ関係者皆様の切なる願いが通じたのでしょうか、ガザのゲートを通過することが出来たのでした。

広瀬川美術館では、16 日（土）にアーティストトークを開催することにし、三人の来橋を待ちました。この日、山本龍前橋市長の計らいで急遽シティエフエムに生出演することになり、前橋市民にガザの現状を訴えることが出来ました。

アーティストトークの会場は、美術館のホールで、50 名を超える参加者があり、小さなスペースがいっぱいになりました。上條陽子代表の挨拶・経過報告に続いて、三人の画家達がガザの現状と創作への思いを語りました。想像以上に困難な状況の中で真摯に制作する姿に、参加者全員が感動した様子でした。その中に、1996 年パレスチナ選挙監視団の一員としてガザを訪れた方もいて、当時の様子を語ってくれました。

トークの後、可愛い二人の女の子を連れた女性が、会場で自己紹介をしてくれました。旅先で夫となる男性と知り合い、男性の家族が暮らすガザに単身渡り、結婚式を挙げ、現在は、群馬県内で親子四人元気に暮らしているとのことでした。この話を聞き、困難を乗り越える力と未来への希望を感じることが出来ました。

展示風景（左写真はハワジリ氏と自作の油彩画）



ガザの画家たちの来日に寄せて・徐京植のメッセージ

ガザを眼の前にしてアートは可能か

徐京植（東京経済大学教授）

尊敬する画家・増田常德さんを通じて、上條陽子さんがガザから画家を招き日本各地で巡回展を行う計画をお持ちだという旨を聞いた時、即座に、私にできることなら協力したいと返事した。私にとって「ガザ」「パレスチナ」という命題は、どこか絶対的なもの、拒むことができない、拒んではならないものという響きを帯びている。私の感覚では、それを拒むことは、人間として自分が卑小であると認めることに等しい。

その理由はもちろん、パレスチナの人々、とりわけガザの人々が、20世紀以降の世界において最悪の植民地主義と人種主義を、継続的かつ日常的に強いられているからである。私はそのことをもうかなり以前から知っている。知りながら手を拱いているしかない自分に苛立っている。この世界において、わずかでも人間的でありたいと望む限り、パレスチナを忘れるわけにはいかない。私はそう思っている。

私は大学で「人権論」を講義し、在日朝鮮人をはじめ少数者の問題やナチスによる「ホロコースト」を論じている。その際、私自身の中で常に反復される問いは、あの差別と殺戮が進行している同時代、同時期に、世界の人々はなぜそれを阻止できなかったのか。また、自分自身がその時代に生きていたらどうであったか、というものである。この問いに、簡単な答えはない。だが、考えるのをやめることのできない問いである。そして、それはいうまでもなく、現に、パレスチナ、ガザで進行中の出来事についての問いでもあるのだ。ガザはかつてナチスがユダヤ人を隔離し系統的に殺戮するためにヨーロッパ各地に設置した「ゲットー」の現代版である。ゲットーは、いま続いているのだ。

もう一つの理由は、私にラジ・スラーニという友人がいるからである。スラーニ氏はガザで800年続くという家系の一員であり、現在もガザに拠点を定め、パレスチナ人権センターを運営する弁護士である。彼自身、若い日から何回もイスラエル当局による弾圧を経験している。

私と彼は2003年にテレビ番組収録のため沖縄で初めて会い、対談を行った。それは「イラク戦争」開戦の年であった。スラーニ氏はその後も、たいへんな苦勞をして何回か来日した。2014年にイスラエル軍がガザに侵攻し、多くの犠牲者が出た。そのニュースを、私は身を削られるような思いで見つめた。私の妻は取り乱して「どうしよう、ラジは殺されてしまうかもしれない」と何度も口にした。そんな中、降り注ぐ砲弾の中から発せられた彼のメッセージが届いた。それは、「尊厳」こそ何より重要である、自分たちは「善き犠牲者」となることを拒否すると述べていた。「善き」であろうとなかろうと「犠牲者」にはなあってほしくないという思いと、なんとか「尊厳」を守り抜いてほしいという思いとが、激しく交錯した。

彼はいつもまっすぐに顔を上げて生きている。その姿は私を励まし、恥じ入らせる。彼を知っているため、私の中で、「ガザのパレスチナ人」という抽象的概念が、ラジ・スラーニという具体的人格としての像を結ぶのである。この時の彼と私の対談は「ガザに根を張る」(NHK・Eテレ「こころの時代ーガザに根を張る」2014年12月7日放映)という番組となって残されている。

会うたびに私を驚嘆させるのは、彼の人間としての品格である。他者を差別し、憎悪にかられ、殺戮を黙認ないし支持する者には、到底もつことの不可能な品格である。あまりにも長く続く困難にも関わらず、彼はユーモアを失ったことがなく、「戦略的楽観主義」という言葉を座右の銘として、むしろ私たちを励ましてくれる。どうしてこ

んなことが可能なのか。世界の、そして中東地域の状況はますます複雑であり、私の目には前途は暗澹としている。だが、彼のように顔を上げて生きている人々を知っている限り、私たちの方が身勝手に絶望することなど許されないのだ。

今回、ガザから3人の画家が来日した。「来日した」と簡単な言葉で言うてはならないくらいの辛苦の末に、である。上條さんをはじめとする関係者の言葉どおり粘り強い努力の成果である。彼らは、自らの故郷であるガザから出る、あるいはガザに入るという、ただそれだけのことに、信じがたいほど労力の消耗と屈辱を経験させられる。それでも彼らは明るさを失わず、日本各地で人々と交流した。ガザに帰って行くときには、「さあ、また牢獄に帰ります」と笑って挨拶した。彼らに確実に、わが友ラジと同じ精神が宿っている。そのことは、彼らの作品からも明らかだ。空爆のため天井の落ちたアトリエで絵筆を動かし続けている姿や、例えばミレー、ゴッホ、シャガールなど西洋美術の名作を引用しながらパレスチナの状況、イスラエル軍の暴虐をユーモアたっぷりに告発した映像作品など、見るものの心を動かした。

テオドール・アドルノは「アウシュヴィッツの後で詩は可能か」と問うた。同じように「アウシュヴィッツの後でアートは可能か」と問わねばならず、それは「ガザを眼の前にしてアートは可能か」という現在の問いになるだろう。来日したガザの3人の画家が私たちに投げかけた問いである。

時あたかも日本では「あいちトリエンナーレ」の「表現の不自由展」に対する公権力による圧迫など、あまりにもみすばらしい光景が繰り返されている。（2019/11/25）



2月28日 東京大学東洋文化研究所でのトーク 進行を務める徐京植教授

《報告》 パレスチナ週間 in さっぽろ ナクバの現場から

ガザ絵画展札幌実行委員会メンバー／パレスチナ連帯・札幌：松元保昭

2019 年 1 月に「パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展」が相模原で開催された。1 月 20 日には徐京植さんの講演会が行われ、その翌日、板垣雄三先生から、「これから全国巡回展が各地で予定されているそうだと初めてその知らせが札幌に届いた。上條陽子さんの働きについては何も知らなかったが、「ガザの画家たち」というだけで心が躍った。

半年もあれば何とかなるだろうと高を括っていたら、にわかに、オリンピック前に完成させておきたいまやかしの白老「民族共生象徴空間」建設を主軸とした「アイヌ施策推進法」が国会に上程され、この闘いに奔走した。時同じくして、天皇代替わりと新元号が繰り返し喧伝され、昨年に引き続き「天皇制廃止」を呼びかける田中利幸講演会の準備も重なった。（昨年も含めた全記録が反天連ブログに掲載されている。）

というのは、ここ 20 年ばかりの札幌のパレスチナ連帯運動は、2002 年ジェニン虐殺に抗議した集会で板垣先生から「歴史の足元を見詰めよう」と警告され、翌 03 年には、「先住民アイヌと交流したい」と来道したライラ・ハリッドに触発され、多方面で活躍されている地元の市民運動、民衆史運動、アイヌ民族、在日朝鮮人、キリスト教界、仏教界、労働組合などと協力連携して進められてきた経緯があるからである。私たちの実行委員会も、多様な運動を担っている市民活動家で構成されていた。

9 月 3 日から一週間、「パレスチナ週間 in さっぽろ ナクバの現場から」としてガザ絵画展を中心に、期間中二つの講演会を開催した。ひとつは、パレスチナで生み出されたキリスト教徒の解放の神学である。圧倒的多数のムスリムと共にナクバ以来闘ってきたキリスト教徒は現地で 1 割にも充たないが多様な宗派のかたちで共存してきたのがパレスチナである。東エルサレム郊外にサビールというエキュメニカル（超教派）なオフィスがあるがこの時期、エルサレム聖公会のナウム・アティーク師『サビールの祈り パレスチナ解放の神学』（教文館）が翻訳された。聖公会北海道教区の協力で、翻訳者：岩城聡氏・応答者：清末愛砂氏による「パレスチナ問題とキリスト教」と題する《サビール講演会》が実現した。戦後の長い「日米同盟」のせいで、北海道でも福音派教会が半数を超えるようになった現実に楔を打ち込みたかった。しかし、トランプ政権の支持基盤であるキリスト教福音派にメスを入れるまでにはいかなかった。

いまひとつは、ディアスポラ・ユダヤ人、難民とされたパレスチナ人、故郷からも国家からも排除された在日朝鮮人、これら三重のディアスポラを生涯の探求テーマとし、「パレスチナ人と朝鮮人の同時性」を生きてきた徐京植さんの講演会「パレスチナから考える東アジア」。まず、ラジ・スラーニへのインタビュー「NHK こころの時代—ガザに根を張る」（2014 年 12 月）の上映。ラジのことは「普遍的な真実のための人類への責任」を手掛かりに「人間であることを恥じる」というアーレントのことは

から自らのディアスポラ体験を重ね合わせ、歴史的に「他者」と出会いそこない「自発的臣民」に類落している日本人の現状に警告を発してくれた。

メインの「ガザ絵画展」会場は札幌市教育文化会館ギャラリー。出入口に書家山田聳宇氏による「パレスチナ週間 in さっぽろ ガザ絵画展」、「描くことは生きること 抵抗すること 心をつなぐこと」の揮毫が会場に風格を添えてくれた。幅 16 メートル×高さ 3 メートルの向かい合った長い壁面 2 枚に、ソヘイル、ハワジリ、イッサの作品 48 点がゆったりと並べられ、横長ギャラリーの側面に上條陽子さん制作の「パレスチナと日本の子どもたちの合作」がちょうど 4, 5 メートルの幅ですっぽり収まった。さらに余白には、ガザ・西岸の地図、入植地と分離壁の地図、札幌市・北海道との面積比較図など占領支配のデータが浮き彫りにもされた。加えて、獄中 44 年の冤罪を闘い抜いてきた星野文昭さんが先ごろ異常な「病死」を遂げたのだが、獄中で描かれた「パレスチナの子ども」も飾られた。

搬入・展示後のオープニングには支援者 20 数名が参加、ソヘイルら来日時の「ビデオメッセージ」の上映、相模原から駆けつけてくれた上條陽子さんの「パレスチナの子どもたちと私」というお話、続いて白山晴雄さんが「監獄としてのガザ」と題しガザを取り巻く輪郭を話してくれた。その後ギャラリーのオープニング・パーティーでは、ファラフェルやハンモスなどアラビック料理も提供され上條陽子さんを囲んで乾杯や祝いの声が響いた。

翌日は、NHK 札幌放送局と北海道新聞社が取材に訪れた。それぞれ上條陽子さんが対応し、NHK はその日の昼と夕方の 2 回、ニュース放映してくれた。北海道新聞は翌 5 日朝刊の道央圏版に大きく取り上げてくれた。おかげでその後は入場者も増加し、会期中 6 日間で 364 名をカウントした。

会場では、以下のようなたくさんの感想が寄せられた。

「以前よりパレスチナには関心があり少しは知識もありましたが、絵画での表現には胸に迫るものがありました。これからは私なりにパレスチナを知り、私なりの小さなエールを送り続けたいと思いました。素晴らしい展示をありがとうございました。」(M)

「表現することが、人間としてあらゆる理不尽に抵抗すること。でも現在の日本では表現することがあまりに軽んじられていないでしょうか。表現とは文化の持つ力であり、文化とは本来人間の心を耕すもの。じっくりと表現者の内奥の叫びと物言わぬ哀しみこそどんな言葉より力を持ち人の心をしっかり結びつけてくれる。権力にとっていちばん怖いのは、表現者の持つ“力”。表現されたものは国境を越える。」(F)

「ソヘイルさんの白黒で描かれた絵に、とくに惹きつけられます。黒い線のリズムや強弱が、よりまっすぐ鋭く魂の鼓動を刻んでいるからです。絶望的な境遇の中で生きること、生き続けるということについて考えます。それはパレスチナの方々の立場に限らず日本においてもあること。日本社会でも

ハリボテの繁栄の中で、命や人権を蔑ろにし、武力と圧政をめざす危険な流れが大きくなっている。人間の持っている根源的な感覚と感情を無視せず、そこに立ち返り人と共有する場に絶望から希望を紡ぐ火が育てられないだろうか……。」(Y)

「展示された絵画もさることながら、衝撃を受けたのはハワジリ作成のビデオ(2013)《ゲルニカ in ガザ》であった。レオナルドからゴヤ、ミレー、ピカソに至る西欧古典絵画にパレスチナの占領の現実をコラージュした連写映像は、数百年に及ぶ西洋植民地主義の生贄にされたイスラーム世界、その先端中東パレスチナの歴史と現在を見事に射貫いている。ヨーロッパ古典絵画をいつまでも模範として崇拝し現を抜かす我らを穿つ。」(X)

「ガザ絵画展」という稀有なイベントを北の大地でも開催する幸運に巡り合えた。作品を橋渡しし札幌まで足を運んでくれた上條陽子さんに感謝したい。(松元記)



上條陽子氏と展示風景（写真：北海道新聞）

戦場の〔お絵描き教室〕

ー 上條陽子のパレスチナ体験 ー

勅使河原純（美術評論家）

洋画家の上條陽子が、はじめてパレスチナの地に足を踏み入れたのは 1999 年であった。針生一郎が「東京からの七天使」と名づけた上條を含む 7 作家たちのグループ展を、エルサレム、ラマッラー、ガザなどパレスチナの主要 3 都市で開催するためである。世界有数の紛争地帯だということに、「しっかりと水が合った」とでもいうのだろうか。以来彼女は本腰を入れて中東と向き合いはじめる。2001 年には、北に位置するイスラエルの隣国レバノンへと招聘されてもいる。レバノンに 11 カ所あるパレスチナ難民キャンプのひとつで活動していた女医さんから、熱心な要請を受けたのである。

上條が個展会場の片隅に置いたダンボール箱であつめた絵具類を使って、難民キャンプの子供たちにぜひとも絵を教えて欲しいという。レバノン人とパレスチナ難民との必ずしも良好とはいえない関係からすると、何やら不穏な空気も感じられないではないが、とにかく画家は後先構わず蛮勇を振るって現地へ赴くことにした。

子供たちは東京と変わらず、クレヨンを渡せば無邪気に絵を描く。だがその 1 枚をみると、飛行機から樽のようなものが点々とつらなり、大きな円弧を描いて地上にまで到達している。いうまでもなくイスラエル軍が、封鎖されたパレスチナ地域へと爆弾を投下する、いわゆる「芝刈りの図」だ。地上からは轟音とともに、まるで火山の噴火のような途轍もなく太い火柱と黒煙が立ち登る。そうかと思うと、突然 IS のような黒覆面の機関銃をもった男たちが現れ、物陰から相手構わず発砲してくる。もはや誰が敵か味方かも定かではあるまい。

あどけない笑顔の子供たちが、その裏側にどれほど怖い思いを抱えて日々過ごしてきたかを、嫌というほど克明に教えてくれる作品群だ。針生一郎が残留パレスチナ人たちへの連帯の表明として、イスラエル軍によって引き抜かれた 50 万本のオリーブの木を蘇らせようと、果樹をふたたび「植樹するキャンペーン」を張ったのもこのころであった。

子供たちの絵は当然のことながら、上條自身の作品にも大きな影響を与えずには措かない。例えば彼女には「光」（2017）と題されたインスタレーション作品がある。白い紙にカッターナイフでさまざまな形の穴を穿ったものである。天井から吊るされた紙は、黒い壁にびっしりと囲まれた暗い部屋のなかでは、期せずして自ずと一種の荘厳さを帯びはじめる。だが人々を戒律で縛りつけ、否応なく報復ロケット弾攻撃・自爆テロ・殉教・芝刈りの応酬へと追い詰めてゆくユダヤ教、キリスト教、イスラム教、アルメニア正教など各宗派の過激主義者たちの耳を劈（つんざ）く大合唱とは、まったく別種の荘厳さだ。白い紙のなかでゆらゆらと揺らめく赤い電球は、己れへのこだわりをしだいに捨てはじめた画家の魂そのものなのだろう。

「記憶の塔」（2000—2016）は、ヨルダン川西岸地域とガザ地区の記憶を小さな箱につめて、どんどん積み上げていった作品である。ちっぽけな兵士たち、青いリンゴ、無邪気な赤ちゃん、顔じゅうにあの独得の市松模様のスカーフを巻きつけたアラファト議長、黄色い砂漠とサボテンを思わせる星型、爆弾の落下地点を不気味に暗示するような赤い点々のついた地図…。黒い板に垂らされた白いエナメル跡には、「弱肉強食」と書かれたキャプションがひっそりと添えられているのだった。

2010 年になると、後に「アラブの春」と呼ばれる前例がないほど大きな反政府デモが、中東各地を突風のように駆け抜けることとなる。隣接したシリアでも血みどろの内戦がはじまった。上條陽子は渡航禁止となり、もうひとつのオリーブ・キャンペーンともいうべき戦場の〔お絵描き教室〕は、こうしてあつけない幕切れを迎えたのだった。

だがこの人はあきらめない。2013年には、わずか4日間だけだがガザ地区を訪れて、160人の子供たちと一緒にワークショップを行っている。彼女はまるでそれが、いまを生きる絵描きとしての当たり前の努めでもあるかのように、天真爛漫に振る舞う。だが、悪くするとイスラエル（アメリカ、そしてひょっとすると日本も）とパレスチナ（アラブ）の両方を敵にまわし、どちらからも裏切者扱いされかねない危険極まりない行為だ。

2019年に上條はそれまでとは大きく取り組みを変え、わが国で「パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展」を実施する方向へと踏み出していった。会場は画家が長年住み慣れた相模原市の市民ギャラリーである。ガザ地区で知り合ったソヘイル・セレイム、ライエッド・イサ、モハメド・アル・ハワジリの三人の画家を、わが国へ呼ぼうという大層思い切った意欲的試みである。

ソヘイル・セレイムは元々ガザに生れ育っているもので、恐らく難民ではないのだろう。アルアクサ大学で美術学士号を取った、なかなかのインテリだ。負傷した人々を木炭で生々しく写したシリーズのなかに、利き手の「右手」を描いた作品がある。すでにギブスで固められた「左手」（図版①）の方は、傷が決して軽くないことを示し、ヌッと突き出された足首は車椅子の不自由な生活を連想させるだろう。痛みに耐えて横たわる「上半身」（図版①）の絶望に打ちのめされた表情にいたっては、しばしば呆気なくやってくる死さえ予感させるものがある。そうした目でながめ返すと、右手の手首をきつく縛るアラファト風の布は、必ずしも傷を癒やすためだけではないような気もしてくる。この手を使って、この人物は一体どれだけイスラエル兵に向かって石を投げ、インティファダ（一斉蜂起）の先頭を切ってきたことだろう。

終わりのみえない武力闘争を、このままつづけていてもいいのだろうか。石を投げる手をあえて縛って、封ずる必要があったのではないか。妻や4人の子供たちだって口にはしなくとも、一刻も早い平穏な暮らしの到来を待ち望んでいるに違いあるまい。ソヘイルが描く横倒しの「顔」は、パレスチナ全体にみなざる怨念（報復への限りない欲求）と個人の希望のあいだで思い悩む人々を、率直にあらわしているのではないだろうか。

ライエッド・イサは1975年の生まれだ。現在ガザの難民キャンプの一つで暮らしている。彼はガザの特筆すべき現代美術動向エルチカ・グループの創立者の一人で、海外でも立派に活躍してきた。イタリアではローマの国際美術賞を獲得したことさえある。そうした経歴からすると、彼のアートへの情熱は強烈で並外れたものがあるのだろう。

人物画が得意で、いかにもパレスチナ人らしい人懐っこい表情を、丸味を帯びた柔らかなデッサンにのせて描き出している。首にアラファト風のスカーフを巻き、手には大抵マンドリンに似た民族楽器をしっかりと握っている。注目すべきは「人物」（図版②）で、草原に敷かれた絨毯の上に横たわった男が、楽器を片手で押さえながら転寝（うたたね）している、みるからに大らかな作品だ。ほのぼのとした様子が、かつて旧約聖書申命記に「乳と蜜の流れるカナンの地」と謳われた豊穡の大地を、実写と空想を織り交ぜながら精一杯明るく描きとったものだろう。

ガザを含め地中海とヨルダン川・死海に囲まれた一帯は、その昔綿花が生い茂り、ガーゼの語源になったという説があるほどである。イスラエル人ばかりでなく、パレスチナの人々にとってもそこがまた掛けがえのない土地であることに変わりはない。サボテンしか生えない埃っぽい砂漠地帯を一瞬忘れさせてくれる、絨毯のまわりに生い茂る種々雑多な草花は、まさに羊や牛を引き寄せる乳と蜜の源にほかならない。爆撃で家を失い、サボテンを草履がわりに履く苦しい生活を強いられてきたイサだからこそ、乳と蜜が流れ美しい花の咲き乱れるパレスチナは、紛れもなく永遠の憧れの地なのだ。

イサはまた、黄金に輝くエルサレムの「岩のドーム」を得意として度々描いている。「風景」では「アルアクサ・モスク」と合わせ、金銀の円形ドームをたくみに一つの画面に収めている。イスラムの教えに対しても決して頑なな解釈に走らない自然体の画家、それがライエッド・イサという人の本質だといってい

モハメド・アル・ハワジリは、ガザの難民キャンプで生まれている。彼はもっぱら仲間の友人たちや家畜をテーマとする画家だ。恐らく酪農（放牧）の仕事にも長らく従事してきたのだろう。その絵には、ガザの自然と動物に対する頑強なまでのこだわりが感じられる。美術教育にあまり縁がなかったせいか、彼の描く動物たちにはまるで穢れというものが無い。そしていくらか太古の洞窟壁画を想わせるところもあるようだ。ハワジリの家畜たちには、獲物（食料）でありながらそのまま崇拝の対象でもあるような、一種シャーマン的感覚といってもいいものが漂っている気がする。

そのハワジリが家畜ではなくライオンの子供を抱えている。（図版③）いまパレスチナの環境は危機に瀕している。難民により人口は急増し、もはや居住不能といわれるほどの過密状態だ。生活のなかでも水は最も深刻で、量質ともどんどん劣悪化している。電気は一日4時間ほどしか使えない。絵のなかで彼は、われわれ自身が家畜同然の生活なのに「その上、野生動物まで保護しなければならないのだろうか」と叫んでいるように思われてならない。

さて上條陽子の方はといえば、こうしたガザの個性的な三人の画家たちへ、日本でほぼ初めてと云っていい展覧会への招待状を手渡すまではよかった。だが、渡航をもとめてからが大変である。いうまでもなく、イスラエル寄りをもますます鮮明にするトランプ大統領と歩調を揃える国で、パレスチナのアーティストたちを呼ぶということは、必ずしも大方の賛同を得られる話ではないからだ。

来日のためのビザ発給にたつぷりと5カ月はかかり、渡航の際には企画者自身が出迎えに行きたくて欲しいといわれる。上條は「羽田か成田かと思ったら、ガザだったわよ」と笑う。人間だけでなく作品の搬入も「無事に届く可能性はせいぜい2%」程度といわれていた。従って「支援する交流展」（令和1年1月17～22日）は、少なくとも二つの高いハードルをのり越えてようやく実現した、まさに奇跡の展覧会だったのである。

そしてこのプロジェクトを通して、上條のなかで徐々に積み上がっていた「解体、崩壊、壁、騒乱、レイム、侵害」といった、どちらかという後ろ向きな暗い感情は少しずつ溶解しはじめたのではなかろうか。それらに代わって今度は「マグマ」の弾けるようなエネルギーがあふれ出し、日本ばかりか乳と蜜の流れる彼の地をも被いはじめたのだらうと想像している。



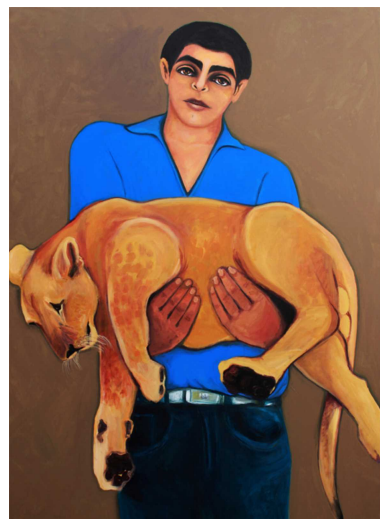
①ソヘイル・セレイムの作品



子ども（Rabae Shalabi 9才）の絵
シャティーラ難民キャンプ（レバノン）



②ライエッド・イサの作品



③モハメド・アル・ハワジリの作品

「ガザという惑星」 批評家 志賀信夫

パレスティナというと、難民キャンプとか、イスラエルと対立といったイメージがある。だが実際は、英米がつくった国家イスラエルがパレスティナ地域を支配して、住民を追い出し難民や移住者とし、蹂躪し続けているのが現実である。イスラエルはすべて領土としてと着々と壁を築き、軍が市民に頻繁に空爆を行い、支配地域の出入国まで管理している。住民たちはインフラも物資もイスラエルを通して手に入れることを強いられている。

ガザの出国ゲートの片方はイスラエル、片方はエジプトだが、エジプト側も同じイスラームなのに出入国を制限している。だがイスラエル側はラマダン（断食月）と巡礼の時期をのぞくと基本的に出入国できず、申請しても何カ月も待たされ、申請が降りてもゲートで数週間待たされるといふ、非人道的な支配である。世界のユダヤ人、ユダヤ系の人々はこれを正しいと考えているのだろうか。

美術家の上條陽子がアートによるパレスティナ支援活動を行うようになったのは、一九九九年に七人の美術家の一人に選ばれてガザ、ラマラ、エルサレムを巡回し難民キャンプなどで「七人の天使」展を行ったのがきっかけだった。上條は現地では絵の具も十分でなく、美術教育も行われていないことを知った。そして、帰国してから絵具を集め、二〇〇一年にはレバノンの難民キャンプで子どもたちに絵画を教え、作品を日本で展示・紹介する活動を中心とする団体「パレスチナのハートアートプロジェクト（PHAP）」を設立し現在

まで続けてきた。パレスティナには入りにくくなっていたが、二〇一三年、再びガザに入ったことがきっかけで、当時の人々と再会し、今回の新たなプロジェクト、アーティストブリッジ二〇一九につながった。

このプロジェクトによるパレスチナ・ガザの画家を支援する交流展（一月一七日から二二日）は、相模原市民ホールで、一〇〇人を越す日本人美術家とパレスティナの画家三人の作品を展示するもの。さらにパレスティナの画家の作品は横浜、前橋などに巡回した。三人は相模原の会期中に来日する予定だったが、前述のように出国が制限され、終了後の来日になった。そのため来日後、横浜のギャラリ―Shimizuで改めて展示を行い、さらに京都大学、東京大学で展示とトークが行われた。筆者は相模原展とギャラリ―Shimizuの展示とトークに参加したが、支援の波が広がり、トークでは小さい画廊に一〇〇人を超える人が詰めかけた。

三人の一人、ライエツド・イサは、一九九七年に壁画をつくるプロジェクトに参加したことがきっかけ。欧州の展覧会にも参加し、ガザでギャラリ―を協同で運営する。ガザの日常を描いているが、今回の展覧会に向けて花を描いた。それはガザの生活は戦争や破壊だけではないことを示したいからだ。

四三歳のモハメド・アル・ハワジリは二五年絵を描いている。動物がテーマで明るい喜びにあふれた色で未来を描く。子どもの頃、家畜を飼っていたから、動物は友だちで生活の支えだった。祖母は家畜の乳で生活を支えたが、自分は絵でそうすると語る。デジタルアートや動物の骨の作品もつくり、苦しい現

実をブラックユーモアで伝えている。

ソヘイル・セイレムは、大学生のときに上條陽子ら「七人の天使」に出会った。現在、グラフィックデザイナーとしても活動しており、ディテールを隠し反発しあう色のコントラストを意識し、個人の暮らしを表現する。

彼らはアートの拠点を自分たちでまかない女性美術家の育成に力を入れている。欧州の支援でアートの教育プログラムを実施し、海外から戻ると人をつなぎ、欧州の作品をガザで展示している。日本の美術家の展覧会もぜひ行いたいという。

ガザは現在、水も石油も電気もすべてイスラエルを通して供給されている。空爆があるどこにいても聞こえる。国境付近は危険でガザなど都市部に人口が集中し漁民も沿岸から数マイルしか出られない。イサの語った私たちはガザという惑星に住んでいる。世界から切り離された惑星で、外には出ることができない」という言葉が心に深く刺さった。

彼らの作品の展示活動は現在も日本で続けられている。今後、日本との作品や美術家の交流がさらに広がり、パレスティナへの理解と支援が広がることを願うばかりだ。上條らが二十年かけて築いてきた日本とパレスティナのアートの架け橋。世界中で紛争があり、パレスティナに目が向きにくくなっているがイスラエルは国際社会の批判を無視し壁を建設し空爆や攻撃を続けている。ナチスに迫害されたユダヤ人がパレスティナ人を迫害するという状態は明らかにおかしい。そして、アジアでは、日本はナチスと足並みを揃えてアジアの地を奪っていたことも、忘れてはならない。

今年の一月、私が何故「パレスチナ・ガザの画家を支援する美術展」に参画したか。また、ガザの画家たちの作品に触れ、何を想起させられたか。

何故参画したか？ は一口に、束縛される社会への抵抗として、見て見ぬ振りをできない衝動からである。中東の歴史や宗教観、紛争地パレスチナとイスラエルの現状はニュースで知る程度であったが、パレスチナの置かれている劣悪な環境の中での生活と、そこから逃れる難民の問題、束縛されるパレスチナの人々の生活を垣間見て、わが国の沖縄の問題と私の中でオーバーラップした。ガザと沖縄が私の中で結び付いたのは、権力によって弱者が容赦なく束縛をうけ続けるという「支配の構図」また「不条理の構図」と言える。そこには民主的自由な開かれた社会は存在しない。

戦後七十四年、イスラエルがエルサレムを中心にパレスチナの地に建国して七十年。当初イスラエルはパレスチナと「共存・共生の道を宣言」。しかし、七十年の間に、パレスチナ人の暮らす地域をイスラエルは事実上支配し、圧迫を加え続け、建国時の誓いはおろか、壁を築き、ガザは檻に囲まれたゲットウ状態いう、自由を奪われた地となっている。

形は変わるが、そのような現状は我が国の沖縄米軍基地問題でも起きている。国政は「島民の声に寄り添う」と云いながら、民意が勝利しても政府の言動は一度も守られていない。そんな宣言を破る権力者の横暴な態度がまかり通る社会構造が、沖縄やパレスチナの現状から透けて見えてくる。そこには民族間の格差をつけたがる、ユダヤ民族をアラブ民族、大和民族と琉球民族という確執した「支配の構図」が色濃く横たわっている。

このような不平等な権力社会を構築している経済主張主義をもくろむ資本家は、常に利益を優先し、価値観として競争原理に奔走する。そうすると彼らには、開かれた平等や自由への社会は元来望んでいないことになる。また多くの人々もご多分に漏れず豊かな経済力に寄り添い支持しているのも、現代社会の流れと高を括っているのも事実である。では、そんな権力に片寄った社会において、開かれた社会のために芸術家はどんな役割を示し、貢献できるのだろうか。

それは、ガザや沖縄のように束縛され不自由を強いられても、個人の自由や尊厳を守る社会を目標として、努力することが肝要であると思う。人が社会の繋がりの中で生きている以上自分の意志に責任を持ち、そして権威や因習によって惑わされることなく、決定する良心や理性に基づき表現することに尽きる。そこには束縛を許さない自由の目としての側面がある。自我の批判精神が創造への表現手段となって萌芽することを理想として追い求めることである。

その手本ともなるのが、今回のガザの三人のアーティストであったと言える。中でもモハマドの「赤い絨毯と開かれたドアが地中海へ向けられ、難民として命を落とした魂を迎える」という家族的民族愛に充ちたアート表現には感動した。また私の中で決定的だったのは、ガザの画家の一人、ソヘイルの作品の一つ「ホーキング博士」を描いた表現の内容にメッセージが集約されていることを感じた。それは、パーキンソン病という難病で全身の運動能力を奪われながらも、車いすに装備した表現機能を駆使して、全世界にメッセージを発信し続けてきたことである。そのことにソヘイルは心打たれ勇気づけられたと語った。壁に閉じ込められたガザでもアートは自由に発信できる。どんな束縛にもうち勝てることをホーキング博士が身をもって証明している事を学んだと。そのことは最も印象的で、無関心を装う利口ぶった冷ややかな現実に、鋭い楔を打った気さえするのだ。閉塞感を覚える昨今、久しぶりで私も温かみを帯びた勇気を頂いた機会となった。

ガザの作家を送迎した記録

イマイ恵子（PHAP 会員／アーティストブリッジ 2019 実行委員）

ガザから3人の作家さんが来日し東京、前橋、京都と20日間の慌ただしいスケジュールをこなし帰国をされましたが、その彼らを招聘したことを記録集に残すことになりました。私は色々迷いましたが成田で彼らをお迎えしてお見送りをした事を思い出して記してみようと思います。

まず最初のお迎えは2月1日成田へ。ガザの作家さんにはチケットをお送りしたのでその搭乗予定の日と時間に私たちは成田へ来ています。ガザはネットの事情がとても悪くて搭乗確認の返事は来ていませんでしたが、それはあまり気にもしてはいませんでした。そろそろ到着かと思った頃に在宅のメンバーから「ゲートが開かなくて搭乗出来なかった」の連絡がきたと電話がありました。パスポートとチケットがあれば飛行機が運んでくれる、そんな当然と思われることがパレスチナでは大変なことのようです。頭では分かっているつもりでしたが実際には全然分かってはいなかったことがその後何度もありました。

一つの国として認めてられていない、占領下にあるとはこんなことなのです。

さて2月10日2度目のお迎えですが今回は「飛行機に乗れたよ」の連絡ももらいお天気も上々ルンルン気分のお迎えです。成田へ向かうバスの中でスタッフの女性4人はこの日のために頑張ってきた、とばかりにおしゃべりに花を咲かせ「グルメや展覧会はどこへご案内しようか」「トークショーでは会費をいただこう。カンパ箱も回しましょう」など来日でやっと実感がわいてきて現実的な意見もバスの中では次々と出てきます。そして嬉しい気持ちと同時にこれからは大変なことが始まるぞ、という不安と期待の交錯した思いで胸がいっぱいになりました。

カイロ発成田着の飛行機は時間にピッタリと予定通りに、しかし到着口に待つ私たちの前に待ち人は現れなく、周りのお迎えの人たちは夫々感激のご対面をすませ、人気（ひとけ）も引き始め、もしや、の不安が頭をかすめた頃にやっと3人が現れました。

まるで昔からずっと知っている人のようにまっすぐに柵越しの私たちに向かって。その時に在宅でマスコミの対応をしてもらっている長沢さんからの「到着口から出る前、未だ中に居る彼らを一枚撮り写メで送って」の連絡が入っていたのを思い出して「出ないで」の合図を送りカメラを向けましたが、一人が例の白黒チェックのアフガンストールで顔を覆い逃げ回り、どうしてもカメラには入りません。もう一人の仲間がようやく彼を引き寄せ肩を抱いて何とかカメラに3人が収まりました。あとで分かったのはシナイ半島を幾多の危険にも遭遇し通過、どうにかカイロ空港に着き、搭乗できて、やっと3人が揃って無事に日本についた。彼が顔を覆ったのは、その感激の涙のせいだったのです。私は随分シャイな人だ、とその時は思っていました。

彼らが夢のような毎日だった、と言ってくれた来日もとうとう最後の日となりました。前々日までは丁度満開の花見の賑わいにも迎えられ京都を堪能、京大でのトークも大成功で終えたばかり。そして昨日は東大でのトークを済ませて夜は本郷のエスニックレストランでお別れのパーティー。

日本に来た時、彼らは小さなボストンバグ一つで軽装でしたが今はそれぞれが大きなトランクいっぱいに荷物を詰めての帰国です。お見送りは4人。スタッフ以外には友人の画家の中嶋さん、上原さんが来てくれて成田でスタンバイ。いつものように搭乗手続きは簡単に済ませられると思っていましたが、全然そうは行きませんでした。カウンターで後ろを振り返るとこの列だけが手続きを待つ人で長く伸びていま

す。それを見て係の人が我々の後ろで列を切り、隣の列に繋げました。後ろにはもう誰一人いなくなったのを見ると、彼らも「これは長くかかるぞ」と。やり取りも日本語ですから、後ろの長椅子の方に移動して待機を決めたようです。上原さんは予め出国の困難な事が予想できていたようで彼らの載った新聞記事の切り抜きなどをファイルにして用意してくれていてそれらを広げて窓口で丁寧に説明をします。私たちも夫々、彼らがいかに優秀で日本で大活躍をしてマスコミにも度々とりあげられたかを口だけでは足りなく両手も使い説得に努めましたが、全然効果はありません。パスポートももちろん通用しないようです。時間も大分経過した頃に窓口の女性が「上司に相談をします」と言って消え、戻って来て「カイロに着き、エジプトで入国がもし拒否されたら戻りの日本への航空機代は自分持ちで良いですね」の念押しも彼らはさせられて、やっとそこを通過することができました。3人には、それも想定内のようにでしたがその時チラリと見せたイサさんのプライドの高い、しかし複雑な表情が今も目に焼き付いて忘れられません。

日本にはパレスチナの大使館もなく、正式にお付き合いが認められてはいないので、こんなに出国も大変なのです。彼らが来日時の入国が最後になったのも、もしかしたらこんな風だったのかも知れない。

彼らの帰国の際の成田での困難を予測し、前もってエジプトの知り合いに安全のための手配をしてくださった長沢さんご夫妻のご配慮が「あーこのことだったのだ」と、その時にやっと理解ができました。カイロに駐在の経験もありで現地のお友達も多い長沢ご夫妻には随分助けていただきガザの3人も3人が揃って、無事にご家族のもとに戻ることができました。パレスチナ、エジプト、日本のご協力いただいた皆さまには心からの感謝です。



2月10日成田空港にお迎え



2月11日ギャラリーSHIMIZUにて打ち合わせ



2月28日お別れ会 日本での最後の夜



3月1日成田空港でお見送り

ワンチームのオールジャパンが起こした奇跡 2019年2月

長沢美抄子

「パレスチナのハートアートプロジェクト」

その驚きの計画

パレスチナのハートアートプロジェクト（以下、PHAPと記す）のイマイ恵子さんから昨年（2018年）の正月に「ガザから50点もの絵が届いたわよ」と知らされたときは、飛び上がるほど驚きました。けれども同時に、画家たちの来日実現はほぼ不可能、超難関ゴールと思っていました。

ガザの美術家集団「エルティカ Eltiqa」（エルティカーウ＝出会う）のメンバーの3人の来日がかなうかもと期待しつつ、アーチストブリッジ相模原展が1月17日から始まりましたが、やはりガザの画家不在のまま最終日を迎えてしまいました。1月26日からは横浜展へと移り、初日にトークが予定されていました。私は淡い期待を抱いて足を運びましたが、彼らの姿はありません。閑散としています。このまま注目されずに、横浜展も閉じるの？と、もったいない気がしました。しかし、驚くことなかれ、この同じ会場が、2月19日と2月23日には入りきれないほどの超満員になるのです。

1月26日、ガザの画家たちが来日しないままの横浜展の初日、耳を疑うほど驚いたことがありました。彼らは来日する、そう信じて疑わないPHAPの委員たちがこう話すのです。「ビザはなんとか取得できたのよ。やっとな。でも、いつ出国できるかしら？航空券はもう無効になってしまっているのだけれどね」と。あとは寝て待つのみ、祈るだけなのです。

しかし、それから1週間待っても朗報はありません。そりゃあそれが厳しい現実というものよ。と思いつつ、突然、そうだ！と閃いたのです。一縷の望みをかけて、ラマッラー駐在の日本の外交窓口を通じて、ガザの画家たちを日本に送り出せるよう支援してほしいと陳情してみました。「できるだけ協力したい」とのうれしい返事。それからです。ガザのJICA関係者を含む人々が一丸となって動いてくれたのです。ラファハ通行所に働きかけるといふ日本の介入のおかげで、まず2月6日に3人はガザ側ゲートを通過することができました。次いでラファハのターミナル内で一泊した後、エジプト側ゲートの外へ出ました。それから、シナイ半島の14時間に及ぶ「地獄の行軍」をなんとか無事に終え、カイロ空港に到達。この報を受けるとPHAPの人たちは大喜

び。今度こそ大喜びではないのです。ガザから送り出した人たちからも歓声が上がったそうです。（＊治安状況が極度に悪化しているため、地獄の行軍と言われる。）

一番難関だと想定していたガザからのエジプトへの出国が実現。それは奇跡でした。原動力はガザの日本人やパレスチナ人 JICA スタッフなどの熱い想いでした。それに加えて、何度もへこたれずに3人のビザ発給のための申請手続きをし続けたPHAPの面々の涙ぐましい努力がありました。3人の画家たちは「ラファハ通行所がまさか開くとは信じられなかった。それもこんなに早く！」と来日後に語っています。

成田空港に今度こそ、と再び迎えに向かったPHAPの女性たち4人との感動の対面の、その瞬間に撮影された写真が送信されてきました。本当に来日できたのだ、と全身が熱くなりました。国際的効力のないパレスチナのパスポートを携えて3人は初めて日本の地を踏みしめ、その後3週間を過ごすのです。一番の年長のソヘイル・サーレムさんがその場で座り込んで涙をハッター（網目模様のスカーフ）で拭っていたと、後で伝え聞きました。無理もないことです。彼らがガザの外に出るとは10年間なかったのですから。

新たな絵画展会場探しとメディアのインタビュー

ラファハ通行所が開いたという知らせをラマッラーから得て喜んだその時から、別の使命が目の前に現れました。予定されていた絵画展はすでにほぼ終了していたので、横浜のギャラリー以外の絵画展会場を確保することが急がれました。ギャラリートークを実現するためにアラビア語のできる通訳を手配すること、プロジェクト継続のための寄付金集め、そしてメディアのインタビューという課題もあります。幸い、これらは努力の甲斐があって実現していきました。

まず、前橋の広瀬川美術館での展覧会の会期を延長してもらいました。次に、有力な絵画展会場として東京大学東洋文化研究所の1階玄関ロビーが浮かび上がりました。幸い長沢栄治教授に利用申請をしてもらい、2月21日から3月7日までの約2週間開催が可能となりました。そのありがたいスペースが、21日から2週間、ガザの画家たちの作品で埋め尽くされ、いつもは寒々としたロビーが、生き生きとして熱を帯びた空間

に生まれ変わりました。

そうそう、ガザの画家たちが来日しているという飛び切りのニュースを日本の人たちに隅々まで知らせなくてはなりません。彼らの生の声でガザの状況だけでなく文化や芸術を伝えてもらう機会を逃してなるものですか。これには朝日新聞と時事通信、それにNHKが応じてくれました。



インタビューの合間の3人（2月15日）

横浜で開かれた1回目のギャラリートーク（19日）は、朝日新聞の高野遼記者（現エルサレム支局長）によるインタビュー記事と赤旗の記事による反響が大きかったのでしょうか。おかげで、満員になりました。当日はNHKの若い佐野圭崇記者が取材してくれて、すぐにその夜遅くに放送されました。その放送が与えた影響は計り知れません。23日のトークでは同じ会場に入りきれないほど多くの来場者で前代未聞の会場風景となりました。入場できず、トークを聞けない人たち一人ひとりに謝らなければならませんでした。後日、ニュースを見た横浜市長が訪問してくれたそうです。画家たちが名誉なことに喜んだのは言うまでもありません。それからもう一つ、時事通信社の、かつてエルサレムに駐在した浅見麻衣記者も、極上のインタビュー記事を書き上げてくれたことを忘れてはなりません。

絵画展と画家たちを支援してくれた人々

絵画展会場が確保でき、トーク会場も整うと、通訳が欠かせないと改めて気づきます。そこでアラビア語の通訳探しに取りかかります。前橋の広瀬川美術館でのギャラリー・トーク（16日）には森晋太郎さん。横浜での19日のトークには松尾晴紀さん、23日のトークには山本薫さん、京都大学（27日）と東京大学（28日）ではJVCの渡辺真帆さん。優秀で人間味あふれる通訳がそろいました。トークの成功はこれで間違いなし！

その過程で資金の追加調達が必要になることを感じ

ます。今後の全国巡回展を実現するための費用もかかります。ということで勝手に募金運動を開始しました。2・28東京大学ギャラリー・トークと絵画展の広報に合わせた寄付金集めが功を奏し、千葉大学の酒井啓子教授他の寄付もあり、少しずつふところ具合が改善しました。（この場を借りて名前をあげない数々の寄付者にお礼を申し上げます。）トーク会場で集めた寄付金も加わりました。それなりの成果を上げたので、3人の帰国後の広島や福岡、武蔵野美大、札幌、ソウルなどでの巡回展にも少しは役立ってくれたはずと思います。

京都での明るい笑顔と憂いの顔

せっかく来日したのなら、京都を見ないで帰らせるわけにはいきません。もう一つの会場候補を京都大学とすることにしました。提案に快く応じてくれた岡真理教授が動いてくれました。大学のホールを確保し、助成金を申請し、緻密な計画を立て、立派な配布資料も準備してくださいました。3人の4泊の滞在費用、東京ー京都間の交通費、講師謝礼、そしてJVC派遣の通訳への謝礼も確保されました。そしてついに2月27日にトーク&作品展が開かれることになり、私は24日から3人に密着同行することになりました。

どこを京都見聞したかを書きましょう。

24日の到着の夜はモロッコレストランで岡教授に歓待され、アートギャラリーのあるホテルで一夜を明かします。朝食後、ゆっくり散策にでます。すると10分後、東寺の五重塔が突然視界に入ります。その瞬間、3人は動けなくなっていました。堂々と高くそびえる木造の塔に圧倒されて立ち尽くしてしまったのです。自分たちはいま「東洋」の端の国にいるのだと気づかされたかにも見えました。

東寺の境内をたっぷり興奮して歩いた後は、京都大学のゲストハウスに急いで移動。荷物を置いたらすぐに哲学の道へ。モハンマド・ハワジリさんに会いたいと日帰りフライトで福岡から京都に飛んできてくれたハワジリ画伯ファンの菅梓さんが待っていたのです。これが初対面というのもすごい。それに加えて、もうひとり待っている人がいます。哲学の道沿いにある木曾漆器店で働くラーエド・イーサさんの日本人の旧友です。12年ぶりの再会だとか。彼女とはスイスで同じ美術コースを履修中に親しくなったというのです。せっかくの銀閣寺・永観堂・南禅寺コースなのに、どこにも行かず、夕方までずっとその店で過ごしました。すぐ裏手に静かに佇むお寺の境内の散策を満喫したので、これ

で良しとしましょう。

翌26日、下賀茂神社から、龍安寺、金閣寺、北野天満宮という順で観光しました。なかでも金閣寺は彼らにとって別格のようでした。エルサレムの黄金のドームを思わせるのかもしれませんが。ドラマチックな出会いにしばれていました。エルサレムは彼らには近くて遠いところ。理不尽なことです、いまのところ多くのガザの人には死ぬまでに訪れられるかどうかもわからない憧れの聖地なのです。北野天満宮では、梅もそろそろ見納めの時期に入っていましたが、お宮と花を見て素直に喜ぶ彼らの様子に、なぜか感動を覚えます。

ムスリムの画家たちが寺社仏閣をどう捉えるのか、仏像などとどう向き合うのかと、心配もなかったわけではありませんが、彼らはそのまま、あるがままに受け入れ、美しいと感動しているのがわかりました。東寺で見た仏像群に対しても敬意をもって興味深そうに観察していました。その寛容さに救われます。

天満宮を後にして、四条河原町までバスで移動し、商店街で買い物をしながらぶらぶらと歩きます。二晩連続で歩く先斗町界限。離日の日も近づいてきているからお土産探しということになるのですが、買うものはもっぱら薬とか家族のための医療用品ばかりです。

前の晩は、イーサさんが背骨と腰が歪んでいて痛みがあると訴えていたことを思い出し、散策していた高瀬川沿いに見つけた整体院に思い切って誘いました。施術の1時間余の間、ハワジリさんと私は無料マッサージ機でリラックスしていましたが、ソヘイルさんだけはまんじりともせず、玄關の椅子でただ黙って待っているだけでした。腰の痛みが消えたイーサさんは購入した矯正用ベルトを大事に抱えて「ガザにはこんな素晴らしい技術を持つ人はいない」とつぶやきます。そして鴨川の橋を渡り、一緒に京大のゲストハウスに戻りました。



(下鴨神社境内で出会った着物姿の女性たちと)



(京都で。東京でも横浜でも地下鉄によく乗りました。)

27日、京都滞在最終日。夕方から京都大学吉田キャンパスで彼らのトークが予定されています。それまでにと、まず清水寺、そして祇園へと向かいました。華やかさ賑やかさが目に染みる界限です。行き交う大勢の着物姿の女性たちを見て楽しむ彼らは、ひたすら無邪気でハッピー。どれだけ写真を撮っていたことでしょう！しかし清水寺の舞台、本堂に辿り着いたところで彼らの顔が暗く沈んでいることに気がつきました。変です。こんなに冴えない顔は初めて。

原因は帰国のことだとわかりました。特にイーサさんが憂鬱そう。どうやら、この機会にヨルダンの恩師に会いに行きたいと諦めきれないみたいです。それを聞いたソヘイルさんの反応は、冗談じゃないよ、の一言。

さらに、もう一つ心配の種がありました。とくにイーサさんとハワジリさんが密かに悩んでいたことはカイロ空港に着いた途端に拘束されてしまう恐れでした。到着するなり、はい、ガザへ！と否応なく連行される図を想像して苦しんでいたのです。私には想像外でした。カイロに数日滞在することすら、ガザの人たちには許されないとは知りませんでした。そしてカイロに寄っていきいたいという深い理由も、次第にわかってきました。会いたい人がいるのです。ハワジリさんとイーサさんが画家として歩みだすのに決定的な影響を与えた日本人がカイロにいるというのです。その人こそ、ガザの難民青年を美術の道へと導いた神谷哲郎さん(現 JICA 技術協力プロジェクトチーフアドバイザー) でした。

そこで私は道々、駐日エジプト大使館とも連絡を取り、彼らのエジプト入国問題の不安解消に努めました。次に、カイロ在住の日本人とエジプト人の親友にもその場で連絡して、カイロ空港で確実に3人を迎え入れてくれるよう対策を講じてほしいと懇願しました。長年カイロに住む中野正道・眞由美夫妻が、神谷哲郎さんと画家たちとの関係を知り、3人がカイロ空港内で勾留されないためになんとかしめようとして約束してくれ

ました。約束したことは必ず果たしてくれる人たちです。（ついですが、眞由美さんはNHK ラジオ深夜便のカイロ・リポーターです。）かくて、カイロ空港問題は解決。3人にそのことを伝え、半信半疑ながら明るい表情に一変です。神谷さんに会うということが、どんなに彼らの一大事だったかがわかる笑顔でした。

清水寺、祇園を後にし、次に彼らが一番ほしがっていた中古のiPhone、iPadをさがしに京都駅近くの電気店まで一路急ぎます。これらは画家たちがガザの外の世界とつながっていくための命綱なのだと、そこで痛感するのです。このiPhoneさがしの後編は、2日後のカイロに向けて飛び立つ直前まで秋葉原で続くのでした。

さて、京都大学吉田キャンパスの会場には少なくとも60名以上が集まったのでしょうか。ガザの声に耳をすましてくれる聴衆は皆、温かでした。英語とアラビア語の若い二人（佐藤愛さんと渡辺真帆さん）の通訳で安定感抜群のトークとなりました。このトークはネットTVで中継されました。休憩時間には絵を買いたいという人も現れました。その場で約束できないのは残念でした。居酒屋での懇親会では和気あいあい、楽しい時間が流れました。京都での彼らのミッションと思い出づくりは終わりました。超多忙の岡真理先生、事前準備と当日の司会、そして接待と、八面六臂のご活躍に感謝します。



（京都大学のトーク会場）

そして再び東京

翌朝は、東京へと再び移動。午後遅くから東京大学本郷キャンパスでの最終トークと懇親会です。40人しか入らない会場が割り当てられていましたが、問い合わせの多さに驚いた研究所側は、急きょ、約100人収容できる3階の大会議室へと替えてくれました。実際の来場者は150人以上だったのでしょうか。2部制にして解決です。こちらでもネットTVで中継されました。

トークを始める前に上映した短い3つのビデオ作品の一つは、（京都大学でも上映したもので、）イーサさんの自宅と工房がイスラエルによる空爆で廃墟にされ、作品もボロボロにされ、瓦礫の中で呆然とたたずむ彼の姿を映したものでした。しかしそれでも前を向こうと絵を描き始めるイーサさんがそこにいました。ハワジリさんの「レッド・カーペット」と「ゲルニカーガザ2010-2013」という2作品はいずれも4分間ですが、これらビデオ映像が与える衝撃は生半可なものではありません。（*Eltiqa Groupでネット検索すれば、この3人を含む7人の作品がご覧になれます。）

特に「ゲルニカーガザ」に感銘を受けられた徐京植教授の絶妙なコメントと司会もあって、3人のトークと質疑応答は熱気を帯びて盛り上がりました。忘れられないやりとりがあります。「なぜイスラエルとパレスチナは仲良く出来ないのか？」との会場からの質問に対して、苦笑いしながらハワジリさんが放った言葉。「それはイスラエルに訊いてください」と即座に切り返した応答です。お見事！また、翌日3月1日が日本統治下における朝鮮の全民族的な独立運動であった「三・一運動」の百周年記念の日であるという意味を徐先生が魂を込めて聴衆に問かけられたのも忘れられません。

トークが終わって、1階のギャラリーでの懇親会。展示絵画をじっくり味わう人もいれば、会話に興ずる人たちもあり、にぎやかでした。こうした交流の時もまた皆の心に深く刻まれたと思います。

そして今度は場所を変え、近くのハラルのアジアレストランへ。本当に最後の夜の懇親会。その祝杯の味はサイコーでした。

本郷での絵画展はそれから1週間後に閉じられましたが、多くの人々にガザの美術に触れてもらえる機会となりました。

画家たちが日本に運んできたプレゼントと 私たちからの贈り物

一緒に道中を楽しめた京都ツアーは私の幸運な特権でもありました。3人はストレートに心が通い合う、ものすごくいい人たち、愛すべき人たちです。ハワジリさんはおちゃめでおおらかで朗らかなのに対し、同じ難民キャンプ育ちで同級生のイーサさんは静かで繊細で気配りの人。ソヘイルさんは少し先輩格。土地を追われた難民ではなく、生粋のガザっ子。用心深くて理屈っぽいところがあります。個性の違う3人は気取らず、いつも自然体。いつの間にか、ガザが隣の町のように近く

感じられてくるのです。この3人が私たちに運んでくれたのは絵画作品だけではなく、人間愛そのもの、ライブのぬくもりでした。

そして、彼らの作品が教えてくれたのは“平和ボケ”と“エセ自由”に麻痺する日本社会のことでもありました。それだけ強烈な輝きを放つスゴイものばかりでした。あの不自由で厳しい日々の闘いの生活から生み出される作品が真剣さにあふれているから心を打つのでしょう。

その彼らに私たちが贈ったのは精一杯の福袋だったと思っています。ガザからの出国を助けたのは「オールジャパン」チームだった言う人がいます。だから、カイロで彼らの身元保証をし、歓迎をしてくれた人たちもオールジャパンで「ワンチーム」の仲間。皆の思いが詰まった福袋はオールジャパンで詰め込んだものです。

彼らが去って2週間後、3月16日のNHKニュースで、ガザの画家たちの来日のことが放送されました。2月28日のトーク直後の出川展恒解説委員によるインタビューで、ハワジリさんは「私は日本が好きです。みんな親切で敬意を持って接してくれます。（日本の人たちは）ガザについてもっと知りたいと関心を寄せてくれました」と語り、イーサさんは「日本の人々や文化に近づくことができました。大きな力をもらってガザに帰ります」と笑顔で語っていました。その2日前に京都の清水寺で見せていた沈痛な表情が嘘のようでした。



（夕方の京都錦市場商店街の通りで）

彼らのその後

カイロ空港内では、中野さんの周到な手配のおかげで、何のトラブルもなく3人はいとも簡単に通過できたそうです。その日は、出迎えに来てくれた神谷哲郎さんたちと一緒に中野さんの友人のエジプト人宅に招かれ、心温まる歓迎パーティが催されました。ガザに帰還する前の「帰国」の喜びの時間だったであろうと思います。その後3日間ほど、旧交を温めたり、ハンハリーリ

街を歩いたり、アハラム紙の社屋に招かれたりと、カイロを愉しんだようです。よかったー。

いよいよカイロからガザへ出発するという日にも写メールで状況をこまめに知らせてくれました。無事にガザに帰郷できるまでは心配でならない日本の“おばさんたち”の気持ちを彼らはよく知っているのです。シナイ半島ロードは、往路のように危険ではなかったようですが、2日間もかかる長旅でした。（ラファハ通行所が開く機会が限られているから、どうしても渋滞になるのです。）この地がかつてのように自由な往来ができる人間の住む大地に戻ってほしいと祈らずにはいられません。そして彼らのパスポートがどの国でも通用する日が来てほしい、来なくてはならないと強く思います。

さて、3人がガザに戻ってからでも PHAP の面々と日本の新しい友人たちは、彼らと SNS を通してつながっています。活気にあふれた美術活動を展開しているのがわかります。イスラエルによるガザ「空襲」も断続的に続き続けていて、その度に彼らの怒りと恐怖もはつきり伝わってきます。2018年3月30日に始まった「帰還の一大行進」運動（イスラエルに奪われた彼らの故郷に還りたいという願いを表す非暴力運動）もガザとイスラエルとの“境界線”で続いており、イスラエル軍による狙撃、弾圧は止みません。そういうガザの抵抗運動も文化活動もう他人事ではなくなりました。ガザが「天井のない巨大監獄」でなく、平和なやさしい楽園になること、作品「レッド・カーペット」で表現されていたような地下トンネルなどでなく、物資も人も出入りできる自由の天地、爆弾に怯えることなく安心して人間らしく暮らせる“ふつうの所”になることを願うばかりです。

彼らの帰国直後から、次はパレスチナ女性画家たちの作品展を日本でやりたいね、彼女たちを招きたいね、とささやきあう人たちがいます。私もその一人。美術家集団「エルティカ」紅一点のディナ・マタルさんの名もすでに挙がっています。今回の経験を活かし、われわれも充電しなおして、再出発です。

イエス、ウィ・キャン！

サウラ・ハッタ・ナスル！（勝利の日まで革命を！）

パレスチナのハートアートプロジェクトに乾杯！

ながさわ・みさこ

（BDS japan 運営委員、西サハラ友の会運営委員）

パレスチナ・ガザの画家達の来日に寄せて

天井の無い監獄と云われたガザから3人の画家が多く、彼らの作品と共に来日した。ガザ出国は非常に困難と聞いていたので嬉しい驚きだった。3人を迎えて多数の日本人画家が作品を持ちより合同展示、連帯が示され、更に会場で双方の交流が行われた事は大変素晴らしい事だと思う。その他ガザの作品は国内で巡回展が開かれているので画家だけでなく多くの人に見られ、様々な事を感じさせた事だろう。ガザの置かれている状況や、そこで絵を描くという云う事がどんな事なのか、様々に話され理解者や興味を持つ人が増えるように思う。ところで私は以前パレスチナ難民キャンプで子供達と絵を描いたり工作をしたりした事がある。その際感銘を受けたのは、70年以上にわたる厳しい弾圧にも関わらずパレスチナの大人達は毅然としてやさしく、子供達は快活で好奇心旺盛、集中力抜群、柔軟かい発想力、旺盛な好奇心等、感心するばかりだった。そのキャンプの人から「この現状をしっかりと見て帰ってほしい。ひどい状況の中で私達が誇りを持って誠実に生きていると外の世界に知らせてほしい。それが我々の存在を世界に思い出させ民族の殲滅を避ける方法なのだ。私達は暴力ではなく、毎日を誠実に送る事で私達の存在を主張して行くのだ。」と云われた。また「それが自分達の精神を支え、次に進んで行けるのだと思っています。」とも。弾圧と殺戮の中でも日常の生活を誠実に行う。すなわち画家は絵を描き、また子供達を集めて絵を描く。それが生きている事の証になる。瓦礫の中で淡々と美しい絵を描く画家の姿を今回私達はビデオの中に見たではないか。私達は、今回知り得たガザの状況とその状況の中で描かれた作品を周知すべく今回の巡回展に人を誘う事から始めようか。そして瓦礫の中で絵を描く人を見て、絵を描く事は自分にとってどんな事か考えてみようと思う。

山脇富士子（PHAP 会員／2010 年・2011 年レバノン渡航）

今年1月の展覧会では私にとってショックな出来事が二つありました。

私は金沢在住なので開催のお手伝いもほとんどできず、パレスチナの画家さん達と数年ぶりに再会できることを、楽しみにのんきに上京いたしました。そこで知らされた事はまだガザを出国もできていないという現実でした。

もう一つは彼ら不在のレセプションの時（上條先生が外務省に行った時）来日できる確率は2%だと言われて、上條先生は2%の希望があるならやりましょう、と超ポジティブな行動力に感動いたしました。先生の偉大さを再確認いたしました。希望を捨てず、パレスチナの方々も上條先生をはじめとする協力者の皆様の努力が実って来日できました。その知らせを聞いたときは涙が出ました。

私は残念ながらパレスチナの方々にお会いできませんでしたが、状況が変わり私たちがガザで再会できる日が必ず来ることを信じて生きていきたいと思っております。

寺尾ユリ子（PHAP 会員／2008 年・2009 年・2010 年レバノン 2013 年ガザ渡航）

2019年1月17日～1月22日からの相模原市民ギャラリーでの「パレスチナ・ガザの画家を支援する交流展」に来られなかった3人の画家達が、今度は本当に来日するとの情報で2月10日私たち4人（上條、イマイ、清水、村上）は成田空港の入国入口で待っていた。どんどん人が出てきてもまだ3人は出てこない。出てくる人が少なくなって少し不安になった頃、体の大きなハワジリさんとソヘイルさん、イサさんの3人が出てきた。日本に来るまで大変だったのだろう。彼らの中には涙が出ている人もいた。「ヨーコ」と言って上條先生と3人は抱き合って再会を喜んでいる。いっしょに行った私たちもとてもうれしかった。この日から彼らとの本当の交流が始まった。

村上修子（PHAP 会員／アーティストブリッジ2019実行委員）

トークの概要

3人は2019年2月10日から3月1日まで日本に滞在し、トークは5回行われました。

2月16日 広瀬川美術館（進行：酒井重義氏、上條陽子）
2月19日 ギャラリーSHIMIZU（進行：上條陽子）
2月23日 ギャラリーSHIMIZU（進行：上條陽子）
2月27日 京都大学（進行：岡真理教授）
2月28日 東京大学東洋文化研究所（司会：長沢美抄子氏 進行：徐京植教授）

以下、内容を要約（ダイジェスト）で紹介いたします。

・どの様な思いで暮らしているのか？

イスラエルの占領下、コントロールが続きパレスチナには自由がない。

アメリカ政府のイスラエル支援が入植を容認し、平和のプロセスを壊し失望が広がっている。

パレスチナ人の住む家を破壊しながら、口で平和平和と言うのはおかしい。

1996年から2000年まで安定していた。当時エルサレムを巡ってあいまいで微妙であったが、シャロンがアルアクサモスクに入ったことで紛争が始まった。ガザはイスラエルのコントロールの下に置かれている。停電は常で発電機、電池を使う。生活が困難である。ガザは仕事がなく工場がないので生産性がない。

ガザでの生活は恐怖を感じる。飛行機が常に飛び爆撃があり、夜間の爆撃に子どもたちはおびえている。

・画材は？

大きな問題である。ガザに持ち込めないし、良いものがない。エルサレムの友人に頼んだり、ラマラの大使館や時に日本の大使にお願いしている。

・パレスチナ人はいろいろな所に住んでいるのは何故か？

1948年パレスチナ難民となって散らばった。（※第一次中東戦争により70万人が難民となった）

ナクバ（虐殺）があった時、父母は7才で逃げた。私は故郷に行ったことがない。いつか行きたい。

今はイスラエル領土なので行くことは不可能である。イスラエルは入国を拒否している。

ガザから出国して戻れない時もある。外国人のガザの入国は難しいが、医療やジャーナリストは入国できる。

外国の芸術家とはファミリーの様な繋がりの中で芸術活動をしている。今回多くの日本の芸術家と繋がった。

1999年ガザの文化センターの「東京からの七天使」で7人の日本の芸術家たちと出会った。その文化センターは爆撃で破壊された。

・女性画家は？

男女平等を心がけている。我々のプロジェクト（画廊エルチカ）で指導している。

女性画家の継続は難しく男性の方がやりやすい。女性アーティストの立ち位置の状況は変わらないが、難しいことは伝統的な中で一人で外国へ出ることは難しい。

私（ハワジリ）は理解して、妻を一人でフランスへ行かせた。勇気を持ち社会を知る必要があると励ました。女性はクリエイターとして家庭の中で持続する難しさがある。男女の差別もあるが家庭によって違う。ムスリムが90%、キリスト教が10%

・ガザに住む画家はたいへんですね？

ガザにいるアーティストは非常に困難な立場だ。失業も多く作品を売るのは難しい。注文を届けるのも難しい。外国の画家たちの支援、パレスチナの支援、アラブ圏の支援によって支えられている。

アーティストとしての務めとしてガザの文化を発信し知らせたい。

文化は抵抗運動の役割もありガザで続けたい。

自己表現でもある。ガザの芸術家としての可能性は少なく難しい。

・画廊（エルチカ）の経営

来日した3人もこの経営に関わっている。アーティストとして若い人たち、女性たちへの指導を行い、画家との交流も行っている。外国の友人が使用料を送ってくれることもある。

指導の継続を志している。フランス、ドイツ、スイスでの展覧会もやっている。

外国の展覧会、国際機関の支援もある。

・若者に何を教えるのか？

芸術は世界を繋ぐ希望である。

テクニックより自由、ディスカッションにより芸術言語を伝えていく。創造力独自のスタイルを引き出すこと、自由な発信を心がけている。インスタレーション、ビジュアルアート、ビデオアートいろいろあるが、常に材料の制約の問題にぶつかること、また会場の制約もある。

世界的言語、時間と空間など制作には幅広く指導している。

・日本に来た感想

今日ガザとの交流展で機会を与えてくれたことは未来に向けて開かれた。ガザに住んでいる芸術家として生きている私たちパレスチナの芸術を外に発信でき感謝している。ヨココに感謝！！

日本に来たことの幸せを伝えたい。芸術は政治とは別、政治の圧力で難しいこともあるが、ガザの実態を伝えていきたい。

私は日本に来て自由であることを感じている。この自由をガザへ持って帰りたい。ガザに真の自由がなくてはならない。

・ハワジリのライオンを抱いている作品

絵が大きすぎて持って来ることができなかった。実際悲しい話でエジプトから秘密のトンネルを通過してライオンの子どもが三頭ガザの小さな動物園にやってきた。

2009年イスラエルの攻撃で一頭が死んだ。

残りのライオンはスウェーデンに引き取られた。

・イスラム教と絵画

宗教を暴力的（戦争など）に使う人（国）、民主的に使う人（国）

長い歴史がありエジプトやトルコの盛んな時代もあった。パレスチナ（ガザ）ではアート、音楽の禁止はない。抵抗、抑圧はない。

エジプトはイスラム教だがたくさんのアーティストがいる。

サウジアラビアは音楽、アート、彫刻はない。国が支配者だ。

アメリカは反イスラムである。アルカイダは虐殺と暴力で宗教ではない。

・パレスチナの未来は？

国際社会の対応はイスラエルへの制裁をしていない
独立国家の希望はあるが辛抱しかない。我々には選択権がない。

生きる希望、子どもたちへの未来を考えている。作品の中に希望を込めている。

1970年代武装闘争があった。日本赤軍の岡本公三の闘争があった。今はヨココだ（武器の代わりに絵筆で）

イスラエルはパレスチナの人口増加を危惧している
西岸地区は人口も多い。ガザは人口 200 万人、若者、子どもが半分以上。



2月28日東京大学でのトーク 会場は満員 !!

2/28東京大学でのトークのアンケートより

普段は詳しく知る機会が少ないガザの状況について知ることができて良かったです。理不尽な抑圧を受けている人々の現状の苦しみ世界に発信する手段としてアートはとても重要であると感じました。「ゲルニカ・ガザ」を見たとき、なぜオリジナルではなく有名な絵画に手を加えたのだらうと疑問に思ったのですが、パレスチナのことを全く知らないヨーロッパ人の人々への訴えだったと聞き、納得しました。作品を見るだけでなく、アーティストの話を聞くことはとても重要だと思いました。

「レッドカーペットの映像で、不肖ながら初めてガザの海を見ました。作品と風景のコントラストに感銘を受けました。世界のいたるところの海と同じ海景が広がり、同じ波の音が聞こえることに気づかせてもらいました。彼らの暮らしが一日でも早く自由になることを願わずにはられません。

ガザでのアート活動、海外での公演、とても意味あることだと思います。ガザにこのようなアーティストがいることを忘れず、応援したい。

日本滞在日程 2019年2月10日(日) - 3月1日(金)

2月10日(日)

成田到着 ソヘイル、ハワジリ、イサ (上條、村上、イマイ、清水)

カイロ発18時30分成田着 お待ちかねの3人がようやく最後に現れた。「ご苦労様、長旅大変だったでしょう～」ついに実現した感激のご対面です。 彼らはバスで横浜の宿舎へ向かった。



2月11日(月)

ギャラリーSHIMIZUで今後についての打ち合わせ → サイゼリア

ソヘイル、ハワジリ、イサ (上條、村上、イマイ、清水、HIKARI)

彼らにとって日本の最初の日。散歩に出かけたがいきなり迷子に。帰りが遅く心配していたら、学生さんが連れてきてくれた。午後は打ち合わせ。「どこへ行きたい？何がご希望ですか？」の質問に彼らは「たくさん取材を受けてガザのことを日本のみんなに知って欲しい」と答えた。夜はサイゼリアで夕食。



2月12日(火) ホテル → 東京大学で打ち合わせ ソヘイル、ハワジリ、イサ (上條、清水、長沢美抄子)

2月13日(水)

ギャラリーSHIMIZUで打ち合わせ ソヘイル、ハワジリ、イサ (上條、清水)

今後のスケジュールを話し合った。バッグなど日用品の買い物に出かけた。冬物衣料やトランクの提供に3人は喜んでくれた。



2月14日(木)

パレスチナ代表部へ ソヘイル、ハワジリ、イサ

NHK取材(上條、イマイ、通訳: 松尾晴紀)

午前パレスチナ総代表部を訪問して、代表部のワリード・シアム氏にご挨拶。彼らはこの時ばかりは、お国の言葉で生き生きと会話をしていた。その後ハチ公前でNHKと待ち合わせ、Hachiと3人は大喜び。午後はNHKの取材をたっぷり受ける。ガザに詳しい取材陣と彼らは会話が弾み、いつの間にか渋谷の街はネオンがきれいに。



2月15日(金) 東京駅 朝日新聞取材 ソヘイル、ハワジリ、イサ(長沢栄治教授、長沢美抄子)

2月16日(土)

広瀬川美術館展示とトーク まえばしCITYエフエム出演

ソヘイル、ハワジリ、イサ(酒井重良副館長、上條、通訳: 森晋太郎)

東京駅での待ち合わせがなかなかうまくいかなくて、前橋行きが大幅に遅れる。ラジオ出演は本番1分前に放送局入りとギリギリセーフ!! 美術館でのトークには山本龍前橋市長も来場した。



2月17日(日)

相模原市桜台小学校 → 相模原市民ギャラリー → フクヤマ画廊

相模経済新聞取材 ソヘイル、ハワジリ、イサ(上條、村上、山脇、福山)

桜台小学校(相模原市)の展覧会へ。会場では来場者とテーブルを囲んでトークを行う。相模経済新聞社の取材を受ける。フクヤマ画廊では国連UNRWAでガザにも駐在していた安藤直美氏と再会し旧交を温める。



2月18日(月)

作品飾り付けギャラリーSHIMIZU 広瀬川美術館搬出 NHK取材

ソヘイル、ハワジリ、イサ(酒井夫妻、上條、イマイ、村上、清水)

広瀬川美術館副館長さんの酒井ご夫妻は展示の終わった作品をマイカーに積み前橋からギャラリーSHIMIZUへ。NHK TVの佐野記者の取材を受ける。



2月19日(火)

ギャラリーSHIMIZU 展示とトーク NHK取材 ソヘイル、ハワジリ、イサ
(上條、村上、イマイ、清水、通訳：松尾晴紀)

トークでは子供の学校のこと、アーティストの生活のこと等関連な質問が飛び交う。
この日もNHKの取材を受ける。NHK BSで夕方と夜に放映。



2月20日(水)

ギャラリーSHIMIZU 林文子横浜市長が来廊
ソヘイル、ハワジリ、イサ (上條、清水)

朝日新聞でガザから画家が3人来日し、横浜市内のギャラリーSHIMIZUで展覧会を開催していることを知った林文子横浜市長が来廊し3人と交流、作品を鑑賞した。上條代表も横須賀からとんぼ返りし対応した。



2月21日(木)

東京大学搬入 (一部作品展) 時事通信社取材 ソヘイル、ハワジリ、イサ
(上條、イマイ、長沢栄治教授、長沢美抄子)

東京大学展搬入展示 (作品の一部)。時事通信社浅見記者の取材。
東京大学での展覧会スタート。



2月22日(金) 自由行動

2月23日(土)

ギャラリーSHIMIZU展示とトーク ソヘイル、ハワジリ、イサ
(大勢の来場者、上條、イマイ、村上、清水、福山、通訳：山本薫)

ギャラリーSHIMIZU展示とトーク。朝日新聞掲載やNHK TVの放映もありお客さまが
数多く来場され、参加をお断りした方も出たのには心苦しい思いがした。
長沢さんが寒い屋外に立たれて丁寧に入場をお断りされていたのも感謝です。



2月24日(日) 京都へ (長沢美抄子、清水)

2月25日(月) 京都滞在 (長沢美抄子)

2月26日(火) 京都滞在 (長沢美抄子)

2月27日(水) 京都大学展示とトーク 岡真理教授 (長沢美抄子、通訳：渡辺真帆、佐藤愛)

2月28日(木)

東京大学展示とトーク、映像 ソヘイル、ハワジリ、イサ
(徐京植教授、長沢栄治教授、長沢美抄子、上條、イマイ、村上、
清水、福山、通訳：渡辺真帆)

東京大学展とトーク お客が多くて2部制で入場してもらった。取材、録画はIWJ (京都
大学と東大で入った) 夜は本郷のエスニックレストランでお別れ会。東大の方、パレ
スチナを応援している方、イベント中にお友達になった方など様々な方が別れを惜し
んで集まってくれた。



3月1日(金)

買い物、ランチ → 帰国 成田空港へ見送り ソヘイル、ハワジリ、イサ
(長沢美抄子、イマイ、村上、中嶋しい、上原)

日本での最後の日。午前は長沢さんが付き添いスマホなどの買い物、お昼
はパレスチナ総代表部ワリード・シラム氏のご招待でランチをいただく。
午後は成田の帰国に間に合うように早めにシミズさんに集合。
エジプト・カイロ経由でカイロに滞在後、ガザへ帰国。



パレスチナのハート アートプロジェクトの歩み

主にレバノンのパレスチナ難民キャンプで絵画指導、制作した作品の展覧会を国内外で行っています。
ここでは現地での活動をご紹介します(2012年以降シリア内戦により現地での活動は中断しています)
2006年 神奈川県 ボランティア活動奨励賞、2007年 第12回 横浜弁護士会人権賞受賞

- 1999年 ガザへ「東京からの七天使」(参加者 上條陽子)
- 2001年 レバノン・ナハルエルバレド難民キャンプで絵画指導(参加者 上條、八鍬、武田)
- パレスチナ難民キャンプ現地での絵画指導、日本で子どもたちの作品展開催を主な活動とする
パレスチナのハート アートプロジェクト(PHAP)を立ち上げる。(代表 上條陽子)
- 2002年 3月レバノンのパレスチナ難民キャンプより、Beit責任者1名(ジャミーラ) 子ども5名(ワリード、ヒクマット、オマール、カトリーン、アフマッド)を日本に招聘。
8月レバノン・アイネヘルウェイ難民キャンプで絵画指導
(参加者 上條 隠地、中田千郷、中田玲子、野中、福島、福山、春日)
- 2003年 7月レバノン・バダウィ難民キャンプで絵画指導
(参加者 上條、中村、中田、西元、村秋、山下、朝倉、今井直人、今井(星)、松井、金崎、福山、春日)
- 2004年 8月レバノン・シャティーラ難民キャンプで絵画指導
(参加者 上條、中村、田端、村秋、山下、島津、福山、春日、藤岡)
- 2005年 8月レバノン・ブルジバラジネ難民キャンプで絵画指導
(参加者 上條、中村、青木、檜垣、三田村、福山、春日)
- 2006年 出発直前にイスラエルのレバノン侵攻のため渡航中止。
- 2007年 8月レバノン・シャティーラ難民キャンプ/バダウィ難民キャンプで絵画指導。
情勢悪化のため規模は縮小。(参加者 上條、中村、三田村、福島、福山、秋本)
- 2008年 7月レバノン・シャティーラ難民キャンプで絵画指導(参加者 上條、寺尾、吉川、多賀、三田村)
- 2009年 7月レバノン・ワーベル難民キャンプ/ラシャディエ難民キャンプ/ナハルエルバレド難民キャンプで絵画指導。(参加者 上條、中村、寺尾、多賀、吉川、格地、篠田)
- 2010年 7月レバノン・エルバス難民キャンプで絵画指導。
ベイルートの国連ユネスコパレスで「パレスチナ・レバノン・日本の子どもの絵画展」を開催。
(参加者 上條、寺尾、多賀、田端、山脇、岡野内、尾崎、渡辺、高田、中西、岩森、石渡、福山)
- 2011年 7月レバノン・ブルジシュマリ難民キャンプで絵画指導
(参加者 上條、多賀、三田村、山脇、岡野内、尾崎、佐藤、関口、袴田)
- 2012年 シリア内戦による情勢悪化のため渡航中止。以降レバノンでの絵画指導は中断している。
- 2013年 8月ガザ・アトファルナ聾学校とナワール子どもセンターで絵画指導(参加者 上條、寺尾)
上條代表は今回来日の3人に1999年来、15年ぶりに再会する。



2002年 来日記録集

子どもの作品展は日本、海外で多数開催しております。

協力 NPO法人 パレスチナ子どものキャンペーン(東京・目白)
Beit Atfal Assumoud(レバノン・ベイルート)



2004年 シャティーラ難民キャンプ



2005年 ブルジバラジネ難民キャンプ



2007年 バダウィ難民キャンプ



2009年 ワーベル難民キャンプ



2010年 ベイルート・ユネスコパレス



2013年 ガザ・アトファルナ聾学校

<御 礼>

この度は大勢の方のご支援により来日が実現し、展覧会やシンポジウム、トークを開催することができました。心より感謝申し上げます。3人は無事ガザに帰国し、再び作品を制作していることでしょう。平和な日々をを願わずにはられません。

PHAP代表 上條陽子

敬称略 お名前漏れはお許しください。記載以外にも多数の方にご寄付・ご協力いただきました。

寄付してくださった方

阿部博紀	小林はくどう
板垣雄三	酒井啓子
岩浅紀久	柴崎美枝
岩浅明子	鷹木恵子
カクダナオ	高原浩一
川上哲	中野正道
熊谷圭知	ツジヤマケイコ
小泉龍人	
アハリー・アラブ病院を支援する会	

2/16 広瀬川美術館 カンパ
2/19 ギャラリーSHIMIZU カンパ
2/23 ギャラリーSHIMIZU カンパ
2/27 京都大学 カンパ
2/28 東京大学 カンパ

通訳・翻訳

山本薫	森晋太郎
松尾晴紀	渡辺真帆
佐藤愛	
稲垣善子	稲垣正子

協 力

ギャラリーSHIMIZU	相模原市立桜台小学校
広瀬川美術館	J A A L A 美術家会議
東京大学東洋文化研究所	パレスチナ連帯・札幌
武蔵野美術大学	せこへい美術館
京都大学	AWA現代アート展2019
桐生大学	田川市美術館
金沢湯涌創作の森ギャラリー	

メディア

NHK	まえばしCITYエフエム
朝日新聞社	上毛新聞社
赤旗	相模経済新聞
時事通信社	I W J
新美術新聞	アゴラ
神奈川新聞	

ご存じですか？ 第二のパレスチナが存在することを！！

西サハラはモロッコが3/4を占領し、1/4が西サハラ解放区となっている。西サハラ難民は45年間難民として生活している。モロッコはイスラエルの後ろ盾のもと、占領地に高さ6〜7mの砂の壁を2700km建て600万個の地雷を埋めた。「我々はパレスチナ難民と同じだ。パレスチナの国旗に三日月と星を加えたのだ。」（文責 上條陽子）



展覧会賛同者

浅野修	越沼正	船津ほなみ
池田忠利	小松原浩	福井慶子
石原章吾	小林典子	福岡美加子
石原智是	清水みどり	福山茂
石渡弘	志賀信夫	松川暖子
伊藤恵子	丹野由美子	宮田徹也
石川佳子	武居利史	村上由紀子
一ノ瀬千恵乎	立浪佐和子	室町克代
今井博子	ツトムミズタ	杜今日子
上杉さなえ	手塚廣子	元起巖
右近多恵子	堂免和実	八島久恵
宇津エミ	勅使河原純	山下いくよ
梅田美知子	中里けいこ	山本恭子
犬山千代	長谷川直敏	山脇富士子
恩地日出夫	原田光	吉川和美
金澤毅	畠山康子	吉木晶子
栗木崇宗	林千賀子	横山タケ子
河村豊子	葉若幸子	渡辺幸子
加藤節子	廣戸節子	渡辺敏子
熊谷悠子	福島吉辰	渡辺貞之
倉橋利明	藤原敏雄	渡辺徳子
倉橋正美		

助成金

相模原市国際化推進事業支援金

<巡回展予定>

田川市美術館（福岡県）
桜台小学校（相模原市）
ギャラリー・イン・ザ・ブルー（宇都宮市）
アートホール東州館（北海道深川市）
巨大じゃがいもアート館（北海道十勝市）
済州島ギャラリーNORI（韓国）

皆様からのご寄付を募っております。パレスチナの子どものたちの画材や教育に使われます。

みずほ銀行 相模大野支店 普通 2728270

（名義）パレスチナのハート アートプロジェクト

PHAP会員（青字はアーティストブリッジ2019実行委員）



上條陽子 イマイ恵子 清水みどり 村上修子
澤田サチ 福山茂 HIKARI 石渡弘
山脇富士子 澤田昌子 寺尾ユリ子 吉川信一
山下裕子 青木良浩

ガザの画家3人の来日記録集

発行日 2020年6月10日
発行者 パレスチナのハート アートプロジェクト
監修 上條陽子 イマイ恵子
編集 福山茂
写真 高原浩一 イマイ恵子 清水みどり
長沢美抄子 中嶋しい H I K A R I

PHAPカリグラフィー 小林真弓

連絡先 上條陽子

相模原市南区南台1-5-8 TEL・FAX 042-743-9047

※メールは福山茂宛に shigeru315@gmail.com



マリナハウスで交流



庭で採れたミカンを頂いた

1999年



ソヘイルの巨大壁画



飯塚里子 上條陽子
スレイマン・マンスール（パレスチナを代表する画家）
八鍬瑞子

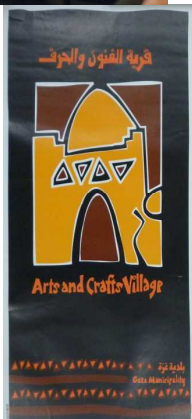


ギャラリーアルワシティ
子ども達のワークショップ



ギャラリーエルチカにて

2013年



アート&クラフト
ポスター



寺尾ユリ子

上條陽子 ソヘイル



2013/09/29

頒価 1,000円